
満月の夜に願いをのせて

夢のツバサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

満月の夜に願いをのせて

【Nコード】

N9235C

【作者名】

夢のツバサ

【あらすじ】

航海時代、海賊がたくさんはこびかっていた頃。一つの幻の船が・
・強くて、正義感があって・・願いの叶う船！その名も、ドリーム・パール号！！その船にいたい何人の、夢をかなえたいと願うものが乗船するのだろうか・・？

ドリーム・パール号

昔、航海時代の頃、一つの幻の船が存在した。

誰も傷つけずにことを済ませ、皆から、高い人気を博していた・・・

・

その船の名は・・・号、そして船長は、ア・・・ユなん
とその船長は、
望みをかなえ・・・でき・・・。

「ちえっ切れてるや・・・」

17世紀の半ばのアンデル港の片隅で、

そうつぶやいた少年と少女たちを潮風がゆっくりなでるように吹き
去っていた。

今少年少女たちが読んでいるのは、7年前に書かれた海賊日誌を読
んでいた。

（港ではよくそういう物が流れてくる。この本は、レインボー・ゼ
ウス号のものだったようだ。）

みんなその日誌を笑いながら読んでいた。だが、ミラ・ウィンディ
だけは、漆黒の瞳を輝かせ、こっそりそこを抜け出した。

・・・願いがかなう。

ミラが走る。

・・・願いが！。

ミラが咳き込んだ。

ミラは、急いでむかった。あの小屋へ、あの人のもとへ。この事を
はやく、あの人に・・・！

ドリーム・パール号（後書き）

さて、これからのミラの運命を、どうか見逃さないでやって下さい。

夢と別れ

ミラが向かったのは、大豪邸の裏の小さな今にも自壊しそうな小屋だった。

「マリアンさん!!! マリアンさん!!!」

ミラが勢いよく小屋を開けた。

「どうしたんだい? ミラ。」

そまつで、いくつものチグハグがみられる服を着込み、あみものをしていた、

小奇麗な女性がびっくりした様に、いった。

「あのね、私達もうココのお屋敷さんに、こき使われなくてもいいの!!! おばさん子供いるのに私の面倒見るために、一緒に働こうって言ったでしょ? もういいの!!! 私っドリーム・パール号に叶えてもらうの!!!」

ミラがドリーム・パール号の名を出したとたん、マリアンが、編み物を『どさっ』とホコリまみれの床に落とした。

「今……なんて?」

「えっ? ドリーム・パール号、幻の船と言われた船だよ? どうかした?」

マリアンのあまりの驚きようにミラも驚いた。

「……おばさん知ってるの?」

ミラが、恐る恐る訊いた。

「いいえ、でも、その船を呼ぶ方法を聞いたことがあるのよ……」その事にミラは驚いた。でも、おばさんはそんな事で驚くような人ではなかったはずだ。なのに何故だろう……?

でもミラはそれ以上追求せずに、おばさんに方法を教えてもらった。

やり方はこうだった。

満月の晩、真っ白な紙に願いを書き、海に流すようだった。

「でも、いいかい？ミラ、本当に叶えたいと強く願ってるものにか、来てはくれないんだよ。いいね？」

マリアンがそれと、といって出したのは、かなり美味しいと評判の、ルビー色のぶどう酒を取り出した。

「持っておきなさい。役に立つから・・・。」

夢と別れ（後書き）

読み終わったら、コメントと評価をお願いします！！

第三話

おばさんにお酒をもらうとミラがこういった。

「・・・おばさん、さようなら、ね。」

ミラが目を伏せ、祈るようにいった。

おばさんは、驚いた顔をしてすぐに優しい笑顔になった。

「いっておいで」

そう言われると、一瞬泣きそうになり、ミラは弾丸のように小屋を飛び出した。

「：まったく、親譲りなんだから。」

おばさんは静かに微笑んだ。

夜の街を、潮風優しく吹いている。

その中を、ミラは走り続けた。

どこまではしっただろうか？
をやめた。

ふと、そう思い、ミラは走るの

いつの間にか、港の一番海に突き出ている、細い道にいた。

真っ黒い海を見た、しばらく見ていると、今にも飲み込まれそうだったのでミラは身震いをした。

いつもここでみんなと遊んでいたのに・・・夜って不思議だな・・・
こんなにも怖くなるなんて・・・

しばらくミラは地べたに座って真っ黒い海をみつめていた。

やがてミラは白い紙を取り出し、丁寧に折ると、ぽっかりと口をあけ続けている真っ黒な海に、投げ入れた。

しばらくして、雲が月を隠れさせ始めた。それでも来ない……。

隠れた月がしばらくして出てきても……。それでも来ない……。

やっぱり、港の人が言うように伝説なのだろうか……？

ミラがそっと顔をうずめた。

とても静かな夜、少し何か感じるが、また海底火山が噴火したんだ
ろうか……？

だとしてもココからものすごく離れているからいいけれど……

ああ、何も来ない、何にも、ミラがそうつぶやこうとした――が無理
だった。

なぜなら、巨大な、何かが海を突き破って、目の前に、海水を撒き
散らして、ミラの前に現れたからだ。

それは白い船だった。恐ろしく黒い海と反発しあってる。

その船に金色の文字で何かが書かれていた。

『Dream Pearl』 ……ドリーム・パール号が……！

目を見開いて、船が出てくるのを見ているミラの上に海水がぼたぼ
たと落ちていく。

やがて、船が出てきた。その甲板に……。立派な赤と金色の服で身
を固めた美女が現れた。

その女性の手のひらにさっきミラが投げ込んだ白い紙が落ちた。

「あなたが私達をよんだのね？」

美女は優雅に微笑んだ。

第三話（後書き）

く数少ない読者のみなさまへく
感想を、評価を是非是非書きちゃってくださいな♪お待ちしております
！

第4話

潮風が耳元でうなっていた。ミラの髪がなびく。

もちろん甲板に立っている人の――銀色の髪も。

「ミラ・ウィンディさん、乗船を許可します。」

その女性は、静かに、そして力強く言った。

とたんに船から、『ぎぎぎぎっ』と雑音を立てて、大きい梯子がおりた。

――ついに、ドリーム・パール号に乗船の時が来たのだった。

「で、御代はもってる？」

「へっ？」

さつき乗船を果たし、船長室へと案内されたミラに銀髪で銀色の瞳をたたえた美女は、

間髪いれずそういった。

「あの…お金…ですか？」

ミラが、恐る恐る訊いた。

そんな心配そうなミラを見て、その美女は一瞬『ポカーン』とし、やがて笑い始めた。

「ぷっ!!…ふふふ!!…ちっちがうのよ、そう言うのじゃなくて
!…っ!!」

その美女がきっかり30秒笑いこけている間、ミラは、赤面だった。

「…ふうっ」

「…そんなにおもしろかったですかっ？」

ブスツとした声で言ったミラを見て美女は微笑んだ。

「いいえ。あんまりにも似ていたから、あの人に…」

そういった美女の笑顔はどこか痛そうだった。

それをみたミラはどうしていいか分からず、バックに入っている、お酒をぎゅっと握り締めた。

「っ!そっそれ…!!!!」

「ほえ？」

ミラのお酒をみて美女が叫んだ。

「シャンパーニュおじさんの最高の一品……！」

美女がそういった瞬間、ごっつい海男を連想させる声が後に続いた。

「シャンパーヌ・レッドドリームだあ……！」

「あのお……えっと？」

ミラがスゴイ勢いで『きゃっきゃ』いいまくる二人を眺めやや遠慮がちに

つぶやく。

それも虚しく、二人の会話は続く。

「ゴウ！！トルトンを呼んできて！！あの人この酒にあうツマミ、作ってくれるから！！」

美女が力強く言い放った。

「ハッ……！！船長……！！」

筋肉隆々の大男が意気込み、足早に部屋を後にした。

だが、ミラはもっと別のことに気をとられていた。

「船長……?」

「へっ?」

「あなた、船長なんですか?」

ミラがつぶやいた。

だって、16・17 才くらいの人なのに……

「ええ、そうよ?アージュって言うの。」

「えっえええええええええーっ!!」

あんまりにも驚いたのでイスごと思いっきり後ろに倒れた。

「ゴーン!!!!」

ミラの後頭部に床がヒットした。

うう…ほっ星がぐりゅぐりゅと…?

「…あーあっ気絶しちゃった。」

アージュがしゃがみ込んで、ミラの顔を覗き込んでそうつぶやく。

「でも、まあ、ようこそ我が船へ…」

アージュが静かに言った。

第4話（後書き）

〽読者の皆様へ〽
是非小説評価を、ヨロシクお願いします!!

一日目

『航海一日目』

ざざ…ん…ざざあ…ざんっ…

「あれ…波の音が聞こえる…？」

ミラがまぶたをゆっくり開けた。

しばらく目を開いて『ぼお〜』とした。すると急に昨晚の記憶が蘇った。

「！！ここはどこ？！！あたしは…ミッミラだった！！で昨日―」

「頭を気持ちよく打って気絶したのよ？」

「！！」

「ああ、ゴメンゴメン急に入ってきたらビックリするよねえ…」

アージュがニッコリしていった。

「ええまあ…」

ミラが正座で答えるのを見てアージュはクスクス笑い始めた。

「そんなに肩苦しくしなくてもいいのよ」

「…じゃあアージュ船長？」

「アージュ！」

「船長！」

「アージュ！！」

「船長！！」

「アージュ！！！！」

「船ちょー！！！！」

「…なかなかやるわね。」

「船長こそ…！」

おたがい肩で息をしながら、言う。

「船長…」

「！！」

「…わしじゃよ、わしい…」

180センチはあろう老人が音をたてず、入ってきたので、お互いビックリした。

「アージュ船長、この子は？だれじゃ？」

「ミラって言うの：新入りなの。」

アージュが肩をすくめ、説明した。

「どうも。ミラです。よろしくお願いします。」

ミラが、ぺこりっと小さな頭を下げた。

「おお：わしはのお、ディアンと言うんじゃよ。」

老人が伸ばし伸ばし言うので普通の人の5倍のろかった。

「ところでなあ、船長う：」

「なあに？ディアン：」

「：」

「：ああ！そうじゃった！！デス・ラグナが来た。」

「：なんですってー！！？」

アージュが絶叫した。

「！！」

ミラが聞く間もなく、アージュはコートを引っ掴み、操舵室へ向かった。

—その瞬間、デス・ラグナの声がきこえた。

デス・ラグナ

デス・ラグナ

窓の外はまるで別世界だった。

波はゆうに50メートルを超え、第一波が獲物をしとめようと、真っ黒な口をあけ迫っていた。

「やばいわね…マストが壊れかかてる。あと波も高いし、渦を巻き始めてる…」

アージュが細面を曇らせ、恐ろしいほど冷静に分析し始めた。

「あの、デス・ラグナって？」

ミラが、アージュの曇りようにどきまぎしながらディアンに尋ねた。

「ああ…そおじゃのおー…」

「はやく!!」

ミラがディアンのにろさに、眉をヒクヒクさせながら言った。

「そんなに怒らんでもいいんじゃないけど…」

と、今度は常人並みの速さで言う。

「キャラ作りだったんかい…!!」

ミラが半ばあきれたように言った。

「よかろうに…わしは今女子に飢えてるんじゃ…」

「せんちょーこの人すていいですか？」

ミラがディアンを着る白木綿の服を引っ張りながら言った。

「いいわよ…やるなら窓からね…」

アージュがやっと窓から目をそらし、微笑みながら言った。

「でも、今はダメ。やってもらわなきゃいけないから」

「？」

ミラが小首を傾げるのに対して、ディアンは『ふっ』と微笑んだ。

「もしかして…じゃな？」

ディアンが船長になぞなぞを問いかけるような声で言った。

「ええ…お願いね、ディアン」

アージュが気持ちを鼓舞するかのように言った。

「…よかろう、なんかテンション上がってきたしのお」

ディアンが腕まくりしながら言う。

「それとなあミラ…」

ディアンが思い出したようにいった。

「なあに？」

ミラが固唾を吞んで聞く。

「わしの神業を見てほれるでないぞい♪」

「……」

笑顔でいうディアンをミラはただ眺めることしかできなかった。

デス・ラグナ（後書き）

いったい年寄りディアンはどんな技を見せるのか…？

どうぞ期待下さい！！

デス・ラグナの男

『デス・ラグナの男』

ディアンがゆっくり操舵室を出る。

外に出ると雨と海水でたちまちずぶ濡れになりディアンの着ている、白木綿のシャツが、体

にまわりついた。

「いいのお…」

ディアンがある物を取りだしながら、ゆっくりつぶやいた。

そうしている間にも、海の魔物は刻々と迫っていた。

「っし、いきます…か…」

そう言うディアンの顔は獲物を狩りたくてうずうずしている魔物だった。

右手にナイフ、左手には、ディアンが着ているよれよれの茶色い作業ズボンのポケットから取出

した。

古く、金色の装飾をふんだんに使った豪華なペしゃんこ船長帽だっ

た。

「『デス・ラグナの男』と言われたワシの实力を見せてやろうぞ」

そう言ったあと、さっきの船長帽を目深にかぶり、ナイフを力強く握って、死の海へと飛び込

んだ

「あっ！！船長！ディアンが飛び込んだんですけど！？」

操舵室からディアンの様子を見ていたミラがあわてて叫んだ。

「大丈夫よ…『デス・ラグナの男』と呼ばれる伝説の海賊の一人なんだから」

「???」

アージュの言葉に、ミラはあたまをかかえるばかりだった。

「伝説の海賊…？…デス・ラグナって？…そもそもディアンって何者…？」

「ああそうだった！ぜんぜん海の事とか教えてなかったわね」

「…はい」

「んじゃ、教えちゃいましょう♪」

アージュがにっこり微笑んだ。

●

その頃、ディアンは荒れくる海の中を、慣れた動作で泳いでいた。

「今年はあまり強くないのう…がっかりじゃ…」

ディアンは悲しそうに思った。

実際、20年前のデス・ラグナは100mの波で風はあたたただけで、骨が折れそうなくらいだった

のだ。

しかもその時はちょうど、人食いザメの大量発生の時期だったので、海に落ちたら、サメの

餌食になっていた。

その時、『デス・ラグナの男』が誕生したのだった。

—とまあそれはさておき…

ディアンが回想にふけてた時、第六感が久しぶりに働いた。

「おお…デス・ラグナの種発見…っと」

ディアンは巧みに乱流をさけ、北東のほうを向いた。

そのしばらく先には小さな小さな琥珀色で、ゴツゴツした種があった。

しかも、そこから強風と渦が発生していて、なんとも不思議な光景だった。

これこそ、デス・ラグナの正体だった。

「よし…船が危うくなる前に…っと」

そうディアンは心の中でつぶやき、種に深々とナイフを刺した。

しかし、ココからが、デス・ラグナの男の見せ場だった。

深々と踏み込み、勢いよく伸ばし推進力をつけ、猛スピードで泳ぎ始めた。

普通のじーさんじゃとても無理な芸当だった。

「あと…5秒じゃのう」

ディアンは微笑みながらおもった

ミラの運命

『デス・ラグナの怒り』

嵐が怒鳴るのをやめ始める。

それをいち早く察知したのはアージュだった。

「鎮みがきたわ！ 碇をおろして！！あと15秒しかないわよ！！」

アージュの命令をきくやいなや、船員が弾丸のように甲板を駆け巡りながら、次々と碇を下ろ

す。

その時ミラはあることに気がついた。

「碇が多い…？なんで？」

ミラノ知っている限りでは、大抵の船は碇が最大でも2個しかないと踏んでいたが、

『ドリーム・パール』はそれ以外に予備の碇があった。

「船長！終わりました！！」

船員のひとり…―栗色の髪と瞳の、ミラとおんなじ年頃の少年が叫ぶ。

「全員、船内へ！…さっミラも入って！」

アージュが甲板に立ち、帰ってきたディアンを引き上げながら全員に告いだ。

「さっ！入るぞ！」

とさっきの金髪の少年があたふたしているミラの腕をひつつかみ、船室へと走り出す。

そのあまりの速さに、ミラは驚愕し、足をもつれさせながら足を動かした。

そのすぐ後ろにアージュとディアンも猛スピードで続く。

「カウント5秒前じゃぞおー！」

ミラ・ディアン達が船室に駆け込んだとき、ディアンが皆に告げる。

「ミラ！歯を食いしばって、どっかもっというてよおー！！」

と、アージュが微笑んだ。

「ーへっ？」

ミラが言われたとうりにした瞬間、船がヘビー級のシャブを食らったような衝撃が襲いかかった。

た。

「!!?」

船が右へと投げ飛ばされたような衝撃が船員に襲い掛かった。

「~~~~!!」

ミラが木箱を必死につかんでその衝撃に耐えていた、――が、やはり海賊になりたてのミラにはきつかった

「あっ……!!」

ミラの手が木箱をつかもうと、虚しく箱をかすめた。

ミラの体の行き先は、窓だった。そのまま行けば、荒れまくっている海へとまっさかさまだ。

「ミラ!!」

アージュの白い手がミラの手を必死につかもうと伸びてきた。

ミラがおもいきり手を伸ばす。

「!!」

アージュの手にミラの手がひっかかかった。その次の瞬間だった。

「あっ!!」

ミラが次の衝撃に抗えず命綱が：アージュの手から離れた。

「っ！！」

全員がその悲劇に反応する間もなく、ミラの手から荒海へと投げ出されていった。

ミラの運命（後書き）

ミラがデス・ラグナに飲み込まれてしまった。

ミラはいつたいたくなる・・・！？

評価をお願いします！！

あやつら

ぶくぶく…っっ！ミラのからだか、海水を叩いた。岩に打ち付けなかったのは奇跡だった。

―鼓膜の内側から海の鼓動が聞こえる…荒れくる乱流に打ち付けられ、頭がクラクラする。

ミラが途切れる意識の中そう思った。

アタシ…どうしちゃったの？なにが起こったの？みんなはどこなの？ミラに次々疑問が襲って

くる。

―とにかく、今は海面に上がってみんなを見つけなきゃ…！

ミラが冷め切った手足を力いっぱい動かす。―乱流を掻き分けるように光が射し込む方へと。

「…っっ！息…が…」

ミラがのどに手をやる。早くしないと…息が持たなくなってしまう。

そう思った瞬間、やけに鼓動が大きくなった気がした…前へ、前へ、前へ！感覚のなくなった手

を必死に動かし、足をばたつかせ…。

そして…海面がどんどん大きく迫って―しかしその瞬間、海面がすすむ…。

「あっ…!!」

ミラのからだからどんどん力が抜けていく、そして視界が狭まり…。

『ぶくんっ…!!』

ミラのからだは乱流に飲まれた。

その後の事は、ミラには一つ以外全く分からなかった。

その一つ…それは声が聞こえたこと…

『まっって…今助けてあげるから…』と…。

―その頃ドリーム・パール号・船室

「ディアン!! ミラが…!!」

アージュがディアンの服にしがみつく。

しかし、ディアンは歳をとっているため、さっきの作戦で消耗しつくしていた。

「すまんのお…ミラは助けられんのじゃ」

ディアンの金色の目がじっとアージュを見つめた。

「っつ……!!」

アージュの顔から悲しい色がうかがえた。

アージュがやがてゆっくりとディアンの服を放していく。

そして、近くにあったイスに座り込んだ。

「…アージュよ」

「なに…ディアン？」

「一つ言い忘れたんじゃが…」

ディアンの金色の瞳がいつそう輝いて見えた。

「今日はあやつらの誕生日らしくってのお…」

その言葉を聴いた瞬間、アージュが勢いよく立ち上がった。

「なんですって…？本当なの！！？ディアン！！」

アージュの顔がどんどんはれていく。

「ああ…本当じゃとも…ワシが嘘ついたことあるかのお…」

「ええ…たっくさんあるわよ？」

「…ワシ悲しい…グスンっ…アージュ、嘘つかんでもいいんじゃないよ

…?」

ディアンが乙女らしく、手で顔を覆い隠しながら、さめざめとウソ泣きし始めた。

「読者の皆様が誤解をするじゃー」

「さあ！あやつらの誕生日パーティーにのりこむわよっ！！」

と、アージュがディアンのウソを強引に遮り船員に告いだ。

あやつら（後書き）

さて…あやつらとはいったい…？

どうなるのでしょうか？ 乞うご期待！

誕生日

「困りますわ！？エリー・パリオン様っ！！」

どこまでも磨ききった大理石の廊下で、こざっぱりとした水色のワンピースに白いエプロンを

身に着けた召使の女性が、澄み切った空色のシンプルなドレスに身を包んだ、滑らかな金髪と

真っ白な肌を持つ、とても美しい女性に向かって叫んだ。

「どうしてなの？なんであの子をつれてきちゃだめなの？私はこの国の姫よ？お父様にバレた

ってだいじょうぶです」

エリーと呼ばれた美女のうすい青緑の瞳が召使の方へと向けられる。

「しっ…しかし、私がお叱りを受けてしまいます。」

召使が下に目をむけながら、もじもじと言う。

「…大丈夫です。私が何とかします、なので安心してください」

これには召使も口をつぐんだ。この国の姫で自分とは身分が米粒と巨人並みに違うのに…同じ

年齢なのに…ちっとも威張ることなく、差別することなく、むしろ

この自分に敬語で話すこの

姫の言葉だ―聞かないわけには行かなかった。

「…わかりました。ですがお氣をつけてください。なるべく協力いたします。」

「ありがとうございます。召使さん」姫がゆっくり微笑んだ。

「いいえ。姫は、この『人魚国』の大切なお方ですので…」

召使も微笑みながらいった。

そして、人魚の姫、エリーはあの子のところへと向かった。



深海のそこでそんな風に会話をしていたその頃、アージュたちはまっしろな布にこう書いてい

た。

『THE・ミラ救出作戦』

「いっやあゝこつれでなんかもりあがるわね！」

黒ずみのついたぶつとい筆を持った手で、額をぬぐいながらそう叫んだ。

「…船長、早く救出しないんですか？」

アージュのよゆうっぷりを見て、栗色の髪と瞳の少年が急かすように言う。

「ああ…心配しないでいいわよ。カイ」

アージュはニツコリと微笑みながら、問いかけてきた少年―カイにむかって答えた。

「『あいつら』のパーティは今日の深夜から、衣装とその他もろもろは、発明家のトニーがやって

くれてるし―」

「ってか、パーティってなんですか？」

会話を聞きつけて、一人の船員―マイ・レイニーが言う、小麦色の髪に空色の瞳が印象的の

大人っぽい感じの持ち主だった。

「いい質問ですね、マイ君。」

アージュが、牛乳瓶の底のようなレンズのめがねを素早くかけた。

「船長、それトニーのめがね―」

カイが警告するがアージュは軽くスルーし、マイに説明し始める。

「そもそも、私が誕生日パーティと言いましたが覚えているかね？
(どっかの教授口調)」

アージュがトニーのメガネを小指で『ぐいっ』と押し上げた。

「はい、覚えてます。」

マイがしごくマジメになって答える。

その様子をみて、カイは突っ込みたくなるの『ぐっ』と抑えた。

「こんなのにマジメになってどうすんだよ…ってかそのメガネ必要ないだろ…」

そんな苦悶に立たされているカイをマイが『ぎろりっ』とにらんだ。

「マジメに聞かないと……!!」

「……すまない」

カイががっくりと肩を落としているのもかまわず、アージュの説明が続く。

「あやつらとは、人魚国の人魚たちのことよっ!!」

アージュがそう高らかに叫んだとき、船室のとびらが『バーンッ』と開け放たれた。

その音に甲板で説明をうけていた船員とアージュがふりかえる。

「トツ…トニー…？」

アージュが扉の前にたたずんでいる小柄な老人にしずかにつぶやく。

トニーは、この船の船員の一人で、主に船の整備となんかの機械を発明したりする技術者で、

少しさびしくなった白髪の上に、黒い瞳、ぼろぼろの白衣をまとった愛らしいおじいちゃんである。

「なあみんな…ワシのメガネしらんかのお…」

温厚な声でトニーが言う。しかしその声はドスが効いていた。

みんないつせいにアージュに視線を注ぐ、『こいつだっ』といわんばかりの…。

「なんと…アージュ船長なのかい…？」

凍りついた笑顔でトニーが言う。

アージュはただただ冷汗を流すばかり、この時初めて船員たちが小悪魔に見えた。

「おっ…おちついてトニー…ねっ？」効果なし。

やがて、トニーは懷から毒々しい薬品の入った試験管を山のように出した。

「みんなすまんのお…めがねを取ったらワシ…ワシ…悪魔になって

しまうんじゃない★」

「みっ…みんな？」

船員たちが声をそろえてつぶやく。

「そう…みんなじゃ…」

その瞬間、トニーが老人とは思えないくらいの高さまで跳躍した。

「……！！？」

その時アージュの頭に、ある商人の話を思い出した。

「いいか…！よく聞けよ…！？ 発明大好きなヤツをのせるときやあ
気をつけるこった…『薬品の

悪魔』って言う異名をもったやつかもしれないねえ、だからそいつのメ
ガネだけははずしちやあな

らねえ！死ぬぞ…」

「ああ…トニーのことだったんだ…フツ」

しばらくして、太平洋のど真ん中で死闘が繰り広かった。

トニーをとめろ！

「ひゃあっひゃっひゃっ！！」

トニーの奇声が甲板に響き渡る。まるで悪魔のようなその声が死闘の始まりの合図だった。

そばにおいてあった、薬品の山をトニーがつかむ。

「！！」

船員たちがいち早く察知。我先にと、ベニヤ板、愛用の鋼鉄の盾、フライパン：各々手短にあ

った物や、人生で殴られて一番硬かったものなどで薬品を防ぐ体勢に入る。

ポポポンッ！。かわいらしい音を奏でながら、試験管のなかで眠っていた悪魔の液体の封印を

解除していくトニー。もはや自分が見えてない。

だんっ！

甲板を短くけりあげ、空高く跳躍。老人とは思えないほどの高さまで。

「どうなってんのよーっ！！」

半ば笑いながら、幅涙を流していたアージュが叫ぶ。

「いやあ…！たのしいのおっ最高じゃっ！鬼ごっこみたいでいいのお」

子供のようにはしゃぎながらディアンが叫ぶ。

「…いつまでも子供って、危機感感じなくていいですね」

マイがげんなりと呟く。どこかあきれた顔だった。

そう言ったマイの腕に薬品が付着しそうになる。もはや息のつく暇もない過激な薬品の雨だ。

なんとか…なんとかトニーのを止める方法はなのだろうか…！！

アージュがこめかみに手をあて、うなり声をあげた。

と、その時だった。

「！！」

アージュの頭に一つの名案がうかんだ。

ある。あるじゃないのよ…！自分の腕がたしかならば、成功するはずだ。

そしてアージュは薬品をビシビシと剣で跳ね返しながら、小さく微笑んだ。

トニーをとめろ！（後書き）

さて、（こほんっ）記念すべき？二桁突入。

うれしく思ってます。マジです（笑）

これも皆様が読んでくださったおかげです。

かんしゃしてます☆

有り難うございました。

ではまたドリーム・パール号へご乗船くださいませ♪

ミラは…

アージュが右手の剣で薬品を『ビンビンッ』とはじきながら、左手でかけていたメガネを外す。

「フッ！」

短く息を吐き、メガネを宙に放り投げた。

「！！」

薬品を無我夢中でなげ続けていたトニーは投げられたメガネにちっとも気づいてない。

その瞬間、ものすごいスピードで銃ホルダーから取り出し、構え、メガネのフレームに向けて撃った。

この間約2秒。銃の神様？って聞きたくなるくらいの神業である。

アージュの撃った弾は標的に向かってまっすぐむかい―あたった。フレームに。

その衝撃で、メガネが落ちる方向が変わった。行き先はトニーの顔。

『スチャッ！』と気持ちのいい音がして、メガネが落ち着くようにトニーの顔に納まっていた。

「っしやあっ！はまった！」

アージュのうれしそうにの声を上げる。続いて船員も。

でも、ディアンだけは『おもしろかったのにお…』と肩を落としていた。

「？どうしたかい？　いったいみんな」

ただトニーだけは、みんなの喜ぶわけがわからなかった。

―その頃深海

その子は夢を見ていた…冷たい海の荒波に飲み込まれ、息が苦しくなって、息をしようと、

海面まで泳いで…それから…

「…！！」

ミラの目が見開かれた。

「…ここは…」

白くしみ一つない天蓋がみえ、時折、思い出したようにゆっくりカ―テンがゆれていた。

ミラは人の気配がないことをたしかめると、ゆっくりと身を起した。

ミラが寝ていた部屋は、間違いなく超セレブの邸宅だとわかった。

ピカピカに磨かれた白い大理石が敷き詰められた床。金銀宝石類をふんだんに使用された、

装飾品がたくさんおかれ、ベツトは天蓋つきのキングサイズ。これ以上豪華にして良いんだろうかってくらいだったからだ。

「…夢だ。」

ミラは自分に言い聞かせるように言った。でも、夢ではない。夢だったら、自分がこんな綺麗な

な白のノースリーブのワンピースを着ているわけなかった。

「窓をのぞいたら、アージュたちの船がみえたりして…」

0.0001%の確率でありそんな事をつぶやいたあと、窓へダッシュ。

『ジャッ!』

カーテンをひく音が部屋に響いた。

それ以外は何にも聞こえなかった。ミラの声も、『あっ! ココは○
○海だっ!』という声も。

ただ、静寂だけだった。

ミラは…（後書き）

どもっ、夢です。（ぺこりっ）

この話を読んでくださって、『ありがとう』です。

それでお願いです。まだまだ未熟な私の作品にチョコ

ット、アドバイスを。

おまちしちゃってまあゝす。

ズビシッ！

はうっ…なにするんだあー！（双子の妹にチョップされ

ました。）

接触

「…なにこれ？」

ずっと口を閉じていたミラがつぶやきました。

それもそのはず。

コバルトブルーの海底が目の前にひろがっていたのです。

まあ、見た本人にはびっくりです。熱帯地域にすむひとに目隠して北極まで連れて行き、目隠

しをはずされる様な感じですね。

ま、ともかくミラは驚いたわけです。

ミラは、しばらく外の景色を眺めていましたが、口をパクパクさせ、ふらっ、と床にぱったり

倒れてしまいました。

「……ッノオオオオオ!!」

ミラがゴロゴロと床を転げまわりながら叫んだ。

「…ふうっ」

さすがに疲れたのかひんやりした大理石のゆかに熱い頬をぴったり

とくつつけました。

すぐに体が、冷めてきて、ムックリと起き上がると背後から足音がしてミラはいそいで、ベッ

トの下にもぐりこみました。

間髪いれず、ドアが勢いよく、開いた。

ドカドカと黒づくめの男達が踏み込んできて、360度油断なく見回します。

「…いないぞっ次だ。第2部隊、チームEに報告を―」

ときばきと男達が仕事をこなし、嵐のように去っていきました。

「…なんだったのさ…あいつら…」

ポソッとミラがつぶやきました。本当は返事が返ってこないはずなのに、声が聞こえました。

「よねゝほんと困るわ…ねえゝ」

「!!?」

ミラがベットからはいだした目の前に、ドレスをきた綺麗な女性が立っていました。

ミラがあまりの事に、思わずのけぞってしまいました。いきなり立たれると困りますよね。気

をつけましょう（ニッコリ）…うん。

「だっ…なっ…はえっ？」

ミラが相手を指差し、あたふたとし、ジーツと相手を見て、またあたふた。

そして…

「おっ…お姫様!？」

ミラが叫びました。相手はきよんととして、やがて笑い始めました。

「すごーい! どうしてわかったのっ!? 私がお姫様って!」

「いや…かっこウ的に…」

ミラがモジモジしながら言いました。

その時、

「…あら? あなた…漆黒の瞳なのね…」

静かにその女性がいいました。どこか、遠い記憶を手繰り寄せているように…

「はい。親譲りなんです。特に父の…」

ミラがそういいかけてやめた。急に、悲しくなったからでした。

それに気づいたのか、その女性が言いました。

「…あなたの名前は？」

「ミラです。…ミラ・ウィンディ。あなたは…？」

「ああ…わたし？」

その女性が伏し目がちにいました。―そして…

「エリー・パリオンっていうの。よろしくね」

その女性、エリーは静かに微笑んだ。

乗り込み

「ミラは どうして、あんな危ないときに海にいたの？」

部屋のベットにミラと並んで腰をかけ、エリーはそう切り出した。

「えっ…もしかしてあの時助けてくれた―…？」

ミラが目を驚きで見開いた。

「あれっ？もしかしてわかんなかった？」

「うん。まったく」

ミラがきっぱりといった。

その時、ふとエリーの瞳が昔の記憶をたぐるように少し細まった。

「…？私の顔になんかついてます？」

「いや…なんでもないの」

それっきりエリーは口をつぐんだ。

「せつ…船長、ここで本当にいいんですか？」

カイが、心配そうにアージュにいう。

「ええ…ココなはずだから。トニーの計算に間違いはないわ」

アージュが自信満々にピースをつきだす。

そして、パンツのポケットから、さび付いて汚い懐中時計を引っ張り出し、

時刻を確認する。もうすぐで、真夜中であつた。

「人魚ってさ、『満月にでてくるよ』ってイメージでしょ？」

手にした懐中時計にめを落としながら、カイに問いかける。

「え…とよくわかんないっすけど、そうっぽいですね」

カイが、視線を宙に泳がせながら答えた。

「でもねえ…ちがうらしいのよ。ホントは—」

そういつて上をみあげる。…空は真っ暗、新月だった。

「まさか…？ 新月に出てくるんすか？」

ひどく驚いた顔でカイがいう。

「ええ…そのまさか…ってわけ」

そう、アージュが言った瞬間、船体が大きく傾いた。

「なっ…！」

カイが、バランスを崩し、甲板の手すりにつかまった。

アージュは、事前にこの揺れを知っているような動きで体制を崩さなかった。

中にいた、船員達も、あわてて甲板へと飛び出す、しかしコックのリオル（すらっとした

若い男性である）だけは出てこなかった。

それに気づいたアージュは、近くにいたディアンにたずねた。

「ああ：イタリアン料理をつくってたのお、今頃、キッチンはトマトソースだらけじゃろう」

リオルの悲惨な状態を想像したのか、苦笑いを浮かべながら、ディアンはいった。

乗り込み（後書き）

さて、いよいよ乗り込みです。

最近、学校でこれでもかっくらいい多忙なので、

ちよくちよくしかこれませんが、どうかよろしくです

むかし

彼は落胆していた。せつかくトルトンコックの秘伝レシピを教えてもらってたのに…

彼は、天井を見上げる。

自分とトルトンさん以外は外に出ているようだった。

はぁ…ため息をつき、体をずらす。そのとき、グシャっ！と、さっき一生懸命きったトマトを

手で押しつぶしてしまった。

ここまでくるとなんだか泣けてきた。部屋のかたづけが少し増えてしまった。

そして、トルトンさんに掃除を手伝ってくれるよう説得しようと、いるはずの場所へと目をや

った。

しかし、彼の姿がない！

あわてて探しまわると、トマトの液でぐっしりとぬれた一枚のメモをはっけんした。

「…？」

不思議そうに彼はメモをこすってみた。汚れがとれたメモには、こう書いてあった。

『リオルへー部屋の片付けよろしくー★ トルトンより』

「……はあ」

彼は大きくため息をつき、甲板へとクールに避難しはじめた。

沈んでいく船体、軋むマスト。飛び散る海水。それらがすべて、アージュたちにふりかかってくる。

「第一マスト、第二もよっ！すべてたたむのっ！いそいでっ！」

アージュの号令がかかると、すぐさま船員たちが作業し始める。

アージュも手短にじゅんびを整える。

「終わったものはなかへ！窓も全部しめるのよっ！？」

それを聞くと終わったものは、近くの者を手伝い、船室へダッシュし始める。

アージュもすばやく状況をまとめ、自分もかけだす。

最後の一人が船室に飛び込んだ瞬間、轟音とともに、ドリームパールは、深海に吸い込まれた

「えっ！誕生日い！？エリーさんの？！」

ミラがすんきょうな叫び声をあげた。

「そーなの、だから抜け出した私を連れ戻しにさっきのガードマンさんが探し回ってると言う

わけでした。」

「おい。そりゃアンタが悪い、ガードマンさん達の努力もくみ取ってやれよ。」

やんなっちゃう、と言いたげな顔しながら言ったエリーに、かなり正確な突っ込みを放つミラ。

「…やっぱりそう思う？」

「うん。いい加減でちやいなよ。」

ミラの回答を聞くと、エリーはため息をついた。

「…うーん、やっぱりかあ。さっき召使さんにも言われたんだよね

え…」

顔をしかめながら言うエリー。こうも説得しても出たくないようだ。

「なんでそんなに出たくないのさ、16歳の誕生日なんでしょ？ 青春真っ盛りじゃん」

ミラが率直に述べた。‘ ‘ こうなったからには意地でも出席させてやるぜ！ ’ ’

と内心燃える。

エリーは少し目を見開いたあと、ため息をついた。力なく微笑みながら。

「人魚はね、見た目は人間そっくりなんだけど、水につかると尻尾が出るんだ。」

そう言って、エリーは、自分のすべすべした白磁のような足を見せた。

「！！」

ミラが目を大きく見開いた。どうやらおとぎ話の通りと思ってたらしい。

「でね、私はこの広い海を自由に泳ぐのがなによりの楽しみなの。まだ、この近辺の海しか、

行ったことがないけれど、いつかもっともっと遠い海までいきたい

の。そしてね、ミラ達が

すんでる。『海に向こう』——つまり外の世界を見てみたいの。」

強い意志をたたえた瞳を、正面に向けながらいう。

「でも、16歳の人魚の王族は皆出れないの、もう…人魚じゃなくなっちゃうの！」

瞳に熱いものをたたえて、エリーが、か細い声でいった。

「ど、…どうして？」

「昔…といっても、10年前なんだけどね…海が荒れてた時期だった。

戦争中だったわ。魔力をたたえた人魚の尾を人間達が乱獲し始めた。それで鎧を作ってたの。

魔力があるから、ある程度の攻撃は防げるしね。」

ふとその時、エリーの瞳に何かをかんじた、怒りと悲しみが入り混じった瞳。

急に、ミラは自分がやったことではないのに、罪悪感を感じた。

彼女は恨んでいるのだ。人間を。たくさんの命を奪った傲慢な人間を。

そうミラは感じ取り、静かに目をふせた。

むかし（後書き）

えーと…こんにちは。夢です。

いや…ついに物語の核心を最初に突くお話までできましたね。
うーん。この先後何話くらいで終わるかなー！。

…どうぶん終わらないな…。

っと、まあこの先結構長いです。

この一年では書き終われないでしょうね。

でも！皆さんに楽しんでいただけるような感じで、
バンバン書いていきますんで！

…テストは無視。

—それでは、また☆

奪還

「…戦争中のさなかに、ある一人の少年がきたわ。あいつさえ来なければ、あんな事には…」

顔に陰りを見せながら、エリーははき捨てた。とてもお姫様には見えない。が、今はそんなと

ころではなかった。

「少年…？」

「そ、12・13歳くらいの子でね」

ミラは神妙な面持ちで、その言葉を聴いた。

自分と同年の少年が、いったい何をしでかしたのだろうか？

こっそり、内心で疑問を抱いた。

「ミラ、アンタみたいに流れ着いてたのを見つけて…あたしの姉がさ。何か思いつく限りの会

話はしたんだけど…何一つ口きいてくれなくて。ある日そいつが魔女を呼び出した。

海底の奥底にすむ邪悪な魔女、サメの姿に変身できるヤツで…ヤツを味方につけて、一番強い

魔力の持ち主、王族の魔力に呪いをかけて挙句に、魔女まで魔力を吸い取られた」

「じゃあ、そのときのろいが…?」

ミラがワンピースの裾を握る力を強めながらそうきいた。

「そう…確か、名前は…」

ブーッブーッブーッ！侵入者あ侵入者。みなさん逃げてっちょ。繰り返すう…

「…まったあの老人管理者の仕業かしら？最近あのひとボケてきたのよねえ」

と明日のお天気でも聞いたかのような顔をして、避難勧告をしゃべり続けるタツノオトシゴ型

スピーカーをちらり、と一瞥した。

「いや！違うと思いますよ！ってかなにその反応っ！管理人さんそんなに誤報してた

わけ!？」

「うん、小学校で悪がきがいたずらでやる感じで」

しらっと応えるエリー。この反応からして管理人のおじちゃんのか

なりワルしていたのだろう

ミラの頭の中に、ひっきりなしに非常ベルを押す管理人のおじさんが浮かんた。

「で、でも…」

なんとか外に出ようとするミラ。もしかしたらアージュたちかもしれない。そういう思いからだ

（つつーかぜったい！）

「だいじょーびつ☆私のカンよく当たるから…」

バーンッ！！

轟音と共に、部屋のドアが吹っ飛び、ぞろぞろと全身真っ黒な衣装を着こなし、サングラスを

しっかりつけた、集団が流れ込んできた。中には水鉄砲をしきりに味方に吹っかけている人も

いた。

その集団から一歩、黒衣の女が踏み出してきた。出方はカッコイイのだが…

「ちよっ、ディアン！水かけないでよっ！もお、連れてくるんじゃないわ」

と、あちこちかけられる水を避けながらなので、うまく決まらなかった。

その様子を傍観していたミラたちの視線に気づき、水鉄砲を叩き折って、身づくろいをした。

「あゝ…えっと…そのエリーさん、その黒髪の女の子をとりも…じゃなかったもらいに来

たわっ！」

なんとか、そう切り出し、黒衣の女はいった。

奪還（後書き）

遅くなってすみません＞＜
でも、今回は話の長さにがんばりました^^

導くものたち

黒衣の女―髪が銀色の黒衣の女がそう発してから、沈黙が生まれて
3分後☆

「…なにいつてんのよ、アンタ。ばっかじゃない？」

ぺっ、とつば吐き出し、チンピラのような顔でエリーは言った。

すると、先頭に立つ、銀髪の黒衣に身を包んだグラサン少女の額に
明らかに怒りのマークが浮かび上がった。

『ば…ばっ！短気の船長にんなこといったら…！むぐっ！』とか
『船長、きれるんじゃないぞおい…お肌に悪いぞい』

とか、銀髪の少女の後ろに続く、何人かの集団がひそひそとつぶや
き始める。

そのようなすをハラハラと見守るミラの事なんて忘れたかのように、
エリーとその銀髪の少女が

一歩ずつ踏み出して、対じした形でにらみ合った。

そして、一言。

「なめんじゃねーよ。チンピラ姫」

と、銀髪少女。

「うっせーよ、短気」

と、エリー。

一触即発。西部劇でのコインを落とす前の数秒間のあの空気。

『うげえ…これは、マジ喧嘩?』と誰もが思ったとき…

バッシーン!!

ドアが勢いよく開き、外からボディガードさん達が流れ込んだ。
た。

「大丈夫ですかっ!?!」

と、一人の男がエリーと銀髪少女の間に割って入ろうとしたとき…

「いっっちゃダメッ!」

ミラが思いつきり叫んだ。

「え?」

その瞬間、エリーと銀髪の少女の鉄拳が両脇バラからのめりこんだ。

念を押すと、2人とも見かけによらず、けっこうパワーがあったり
します。

女の子をナメてはいけません。

「ぐっ!!」

かっこいいうめき声と共に、あわれボディーガードさんのひとりは吹っ飛び、豪華な家具をな

ぎ倒して撃沈しました。

「隊長ッ!!」

グラサンをかけたゴツツイ坊主のボディーガードさんの群れが吹っ飛んだ隊長のもとへかけて

いった。

そんなのをほっというて、アージュとエリーがバトルを再開しようとしたとき……

びゅー

と気の抜けるような音と共に、水鉄砲をもった男が二人に浴びせかけた。

「いかんぞお…二人ともケンカしたらのお」

『…』

水をかぶった二人は無言でその男をみやった。

そして一言。

『去れ、ジジイ』

その瞬間男の顔面に鉄拳がダブルでのめりこんだ。

その後も二人の果敢な攻撃は繰り返され、男は動かなくなった。

「リーダー！なにやってんすか！？速くしないと時間が……」

黒ずくめの中の一人がそう警告した瞬間、破裂音がしたかと思うと、濃密な白煙が膨れ上がった。

た。

「わっ」

視界を一瞬で遮断されたミラは思わずしりもちをついてしまった。

そして、そのミラの手を誰かがひばった。

「ほら、いくよミラ」

ミラはそのまま、出口へと導かれるがままに、城をあとにした

導くものたち（後書き）

今回は2か月分を取り戻すための拡大バージョンで、お送りいたしましたあ（・w・）

：ゴメンなさいすんごい更新してませんでしたね。

今度から気をつけます（たぶんw）

では、今後もこの物語を見届けてほしいなとねがっています！
テレる！！

海賊達の島

真夜中の太平洋の海を切り裂くように、真っ白な船が浮かび上がった。

それはまるで、海から飛び立つ、優雅で美しい白鳥のような船だった。

甲板からは大量の海水が滝のように零れ落ちる。静寂だった海に轟音が響き渡った直後、紺碧

の世界に小さな光が生まれた。それはゆっくりと世界をてらしはじめ、やがて空へと昇った。

そうして、朝が始まった。

「ふっ…ふぁあっ」

白い船の一室でミラは窓からの光に照らされ、小さくあくびをした。しばらくして、のろのろと起き上がり、はきなれた茶色の革靴をつっかけた。

そして、白い半そでのTシャツの上にデニムのワンピーススカート。したに黒いショートパン

ツをはいて、部屋をのろのろ出て行った。



「ぎゃあははははっ！」

「のめえええ！思いっきり飲みやがれっ！」

ミラが甲板に上がると、第一声が、爆弾が破裂したようなでかさで聞こえた。

騒音の音源の方に視線を送ると、アージュとディアン、トニーらが、緑色の酒瓶に埋もれ、何

十本目であろうラム酒をラッパのみしていた。

：―そういえば、昨日『ミラを取り戻してやったわよ！酒よ、酒！』とかいってドンちゃん騒

ぎを始めていたような気がする：

しばらくすると、ミラの痛い視線に気づいたのか、アージュが顔をほんのり赤らんでいる顔を

こちらに向けた。

「ああ？…おはよお〜ミラア…っぷ」

そうとう泥酔しているようで、動きがなんかフラフラしている。その周りの船員もだ。

そして、また何事もなかったかのように、またラッパのみし始める。昨日はミラが帰ってきて

半べそかいてたのに。

「……」

ミラがその光景を頬を膨らませ、ふてくされながらと見ていると、一人の男の子が近づいてき

た。

（誰だっけ…）

とミラはとっても失礼なことを思った。そしてこめかみを押さえて考える。

適当に刈っている栗色の髪と同じ色の瞳。肌は少し日焼けしていて、背丈は自分より

少し上くらい…

「まあ、許してやれよ。」

綺麗な顔だちの、その少年は無愛想な顔でそういった。

「は…はあ」

「…—そういえば、まだアンタには名乗ってなかった。カイ。カイ・ローレンスって言う。よ

ろしく」

ミラがそういうと、『あんた、誰?』という空気を感じたのか、名を名乗ってくれた。

ミラとしてはとつてもありがたかった。なんせ『あんた、誰?』っていいづらいし。

「こちらこそ、どうも…です。」

とりあえずお礼をのべると、カイはぼそっとつぶやく。

「まあ…あんたはあんな風な店泣かせの大酒のみにはなんないだろうな」

「…何か言いました?」

「いや、気にするな。こっちの話だ。」

なにくわぬ顔でそう切り上げるなり、カイはそそくさと去っていった。

その直後、見張りの上にいるゴウ（久しぶりの登場）の声が飛んできた。

「船長っ！見えてきましたよ！早く降りる準備してくださいよっ」

その言葉をきいたアージュは片手にもっている酒瓶を軽くあげて「ふああゝい、わたしがあん

ばるう。ぐはははははあっ…つくう」というなんとも情けない返事をよこした。

何が見えてきたか分からないミラは、慣れない手つきで、まごつきながらロープを上り、円の

形の見張りだいにたどり着いた。

そこでは、ゴウが望遠鏡を中腰で覗き込んでいた。そして、ミラの気配に気づいたのか、すぐ

に顔をあげて、こっちを見てくれた。

「ああ、どうした、ミラ。」

「あ、いや…何が見えたのかなって…」

頬を人差し指でかき、横目で明後日の方向をみる。なんかこういうの頼むとき面と向かうと恥

ずかしい。

「ん、それはな」

ゴウがにかつと白い歯を見せて、笑う。そして『クイツ』と望遠鏡

をミラの方にむける。

ミラがそれを覗く。

透明な丸いガラスの世界に見えたのは、さんご礁の綺麗な海に囲まれた、緑の島

にいくつもの船があつまっている『海賊の島』とよばれる海賊達だけの島だった――

海賊達の島（後書き）

わーい（・w・）

ついにこのお話ですよww

次のお話がかくのがとつてもたのしみなんですよ
わーいwwww（↑いい加減とってもウザイ人）

キオク

「うわあああっ！」

ミラは、海賊の島におりたって、そう声を上げた。酒瓶を片手に海賊らしき人々がたくさん行

き交い、たくさんのお店が立ち並び、遠くには緑に覆われた山がみえた。

ミラはにぎやかで、新鮮なその空気を深く吸い込む。にぎやかなその空気が身体に心地よかつ

た。

これからは、カイに初めてのこの島を案内してもらおうと思っていたが、さっきからカイの

姿が見当たらなかった。

「？」

気になって、甲板で荷物と食料の補給じゅんびをしているアージュにたずねた。

「ああ…カイ？それならさっき、東どおりの方に走ってたけど…あわなかったの？」

「うん…今からここを案内してもらおうと思ったんだけど…」

ミラは、東の方角をみながら、説明する。

カイに案内してもらおうかとおもっていたのには理由があった。

みんなとは、出会って日が浅いとはいえ親しく話せるようになった。もう船の一員といっても

遜色がないくらいに。

だが、カイだけは違う。

みんなは私のことを『ミラ』と呼んでくれる。でも、彼だけは決して私の名前を呼ぼうとはし

ない。なぜなのだろう。

—もしかして、認めてもらえてないのかな…

だから、すこしでも認めてもらいたい。みんなとなれたように仲良くなりしたい。

そんな思いからだった。

「私、さがしてくる。昼ごはんまでくらいには戻ってくるよ。」

そういうなり、きびすを返して走り出す。

「あっ、ちょっとまって…！」

アージュがあわててとめるのが、ミラはもうその時には人ごみにまぎれていた。

「…ねえ、ゴウ」

アージュは、しばらく考え込むとたまたま近くを歩いていた小麦色の肌の筋肉質の男に話しか

けた。

「なんですか？ 船長」

「ミラってさ…」

「『ミラって』？」

そして、彼女は難しい顔で、言葉の続きを切り出した。

「この島の道、知ってたっけ？」

「……………」

ゴウは、『Yes』とは言えなかった。

「カイはどこに居るかってことも気がかりだけど…」

狭い裏路地でひとり、ミラは小さくこぶしを震わせてそうつぶやく。

そして、思いっきり息を吸い込み…叫ぶ。

「ここはいつたい何処なのおおおおおおおおおっ!!」

こ…—よお—… よお—… お—…

ミラの叫びは木霊となって、狭い路地の壁に反響し、消えていく。

「はぁ…はぁッ…」

今、ミラはアージュが心配していたとおり、迷子になっている。

いま自分がどこに居るのかも、カイの居場所も、船が停泊している港までの行き方さえもわからなかった。

—うかつだった…なんでこの道知らないのに飛び出してきたの、私。

などと、自分で自分をしかりつけた。しかし、いつまでもそうやっては始まらない。

とにかく、大通りに出ればなんとかなるはずだ。

そして、ミラはより喧騒やにぎやかな声がきこえないか耳をすます。
しかし、何も聞こえない。

じつはミラが居る所は不幸なことに、この島一番の入り組んだ裏路地だった。

素人だけではぬけるのに半日以上は絶対かかるいわば迷路。

まさに、最悪な状況。

「くっそう…誰か迎えにきてくれたりしないかな…」

ミラはひとり、裏路地でそうつぶやいた。



島一番の大通りから少し外れたちいさな花屋に一人の少年がやってきた。

その店で商っている中年の女性は、その少年に、いらっしやいカイくんといった。

カイと呼ばれた少年は、少し笑うと今回はこのはなで花束を作ってくださいと注文した。

その女性は花々を受け取ると、今回もきれいなのを持ってきたね、

という。

そして、

「あの子もきっと、喜ぶだろうね。」

と静かにつぶやく。少年はただこっくりとうなずき、そうですね、と答えた。

しばらくして、女性が見事な花束をこしらえて少年にわたし、少年は御代をはらって、裏路地

へと走っていった。

—あの子もきっと、喜ぶだろうね。

ふと、少年の脳裏にさっきの花屋の女性の言葉がうかぶ。

少年は、走る速度をあげた。

キオク（後書き）

わーい（＞w＜）

ついにこの話かきはじめれたっ！

やった、やった！

ぜひ、感想おねがいします。

感想とか書いていただけると、本気で喜びます。

トラ

大海原が見渡せる小さな岬に白亜の十字架が立っていた。

墓標のようなその十字架の向こうで、真っ赤な夕日が海へと消えてゆく。

ゆっくり、ゆっくり、世界が色を変え始める。

この島で一番きれいな時がやってきた。

そして、その美しい世界の中で、静かに十字架はたたずんでいる――

「どうしよう…ホントに帰る自信がなくなってきた…」

暗い裏路地でミラはそうつぶやくと、今日何回目かわからないため息をついた。

もうまもなく、日没だ。アージュたちに夕方までには戻るといつてあるのに。

しかも、この島の道がわからない彼女は、この入り組んだ裏路地に迷い込んでいた。

―ほんとに、自分はなんて間抜けなんだろう。

そう思うと、自然と瞳が潤んできた。

いけない、迷子でなくてもいいのは、4歳までだ。

と、あたまを振って、気を引き締めた。

「はあ…誰かお願いだから、迎えに来てくれたりしないかな」

と、その瞬間、幸運にも彼女の耳に何かが聞こえてきた。

足音。誰かが右のかどから、息を切らして、走ってくる。

救世主！救世主だ！もう、誰でもいい…とにかく私を大通りまでつれてって！

「あのっ！」

彼女は、タイミングを見計らい、こちらに駆けってくる人におもいきり声をかけた。

「おまえっ…！」

ミラが、思いつきり話しかけた人は、彼女を見て驚きの声を上げた。

手に小さくてきれいな花束を握り締めた、栗色のきれいな髪と瞳…

「カイ？」

彼女は目を見開き、そう叫んだ。

「やった…！見つけたあゝ、探してたんだよこれでも」

「…そうか。でも今からちょっと用事があるから…自分で帰れ」

そういつて、走り去ろうとして…はっし、とミラに服の裾をつかまれた。

「なんだ？」

「いや…その、私正直言うと…」

「言うと…なんだよ」

「道、全くわかんないんです。」

カイは、ポカーンツとした後、大きくため息をついた。

「そーいやそうだったな…」

彼は金髪をクシャツとしてそういった。

「えーっと…迷惑？」

ミラがカイに申し訳なさそうに言うのと、カイは何かつぶやいた後、

「別に迷惑ってワケじゃない。着いてきていいぞ」

そういつてカイは走り出した。その後をミラは着いていった。

トラ（後書き）

やっと期末終わった…！

というわけで、予定よりも早めに、書きました。

もう、テストおわって最高の気分ですw

思い出

カイが走りついた場所は小さな岬だった。

岬の先端に、小さな白亜の十字架がたっていた。

半分ほど、海に沈みこんでいる真っ赤な夕日を背にして、とてもきれいだっただ。

「…」

カイは何もいわずに、もっていた花束をそっと、おいた。

その瞳には、小さな悲しみの色が浮かんでいた。

その様子を、ミラは静かにみつめていた。

その様子を見て、彼女は、何かを感じた。

あれはたぶん、カイの大切な人のお墓なんだろうな…あんな瞳をしてるんだから。

いったい誰のお墓なんだろう？お父さん？お母さん？それとも…

「ひさしぶり、トーラ…」

カイは優しい声で、お墓に向かってそういった。その瞬間、心臓が何故か異様にはねた

そして、呼吸が苦しくなった。しかし、彼女はなぜ、苦しくなったのか全くわからなかった。

た。

カイはその様子には気づかず、十字架の前でしばらく座り込む。

その様子を、ミラはしばらくの間、別世界の出来事のように、眺めていた。

夕日が完全に沈みこみ、ダークブルーの空に小さな光が一つ生まれた頃、ミラたちは

パール号に帰ってきた。

「ちょっと、二人ともお：遅いわよおーつく。ぷはあっ」

二人を出迎えたのは、完璧に食べつくされた二人の夕食と、完全に酔っ払った、船員達

だった。

じつは、パール号では夕食に遅れた人の分は他の人が食べてもいい

事になっているのだ。

カイは悪態づいて、『やられた…』などと、隣でつぶやいていたが、ミラは完璧に食べつ

くされた皿を一瞥しただけで、無表情で食堂を通り過ぎ、コックのリオルが何かを言って

いたのも、聞こえなかったかのように通り過ぎて、風のように自分の部屋がある、地下2

階へ降りていった。

「…お腹すいてないのかしら、ミラは」

酔っ払って、頭の回転がカメさん以下のアージュと船員たちは、そんな間拔けなコメント

をして、再びお酒を美味しそうに飲み始める。

そして、カイは首をかしげただけだったが、コックのリオルはただならぬ雰囲気を感じて

冷蔵庫の中を、ごそごそと探り始めた。

ミラは自分の部屋に戻ってくるなり、靴をぬぎすてて、木製の簡易

式ベットに、

ばふっ、と飛び込んだ。

「……」

さっきからどうも気分がよくない。なぜか知らないけど、いやな気分になってしまう。

ああ…お腹すいた。さっき、何でもいいからもらってくれば良かったのだが、カイの隣にはな

ぜかいたくなかったので、さっさと引き上げてきたので、もらい損ねたのだ。

ミラが空腹と、重い気分をかかえながら、ベッドにうつ伏せになっていると…

こんこん。

と、自分の部屋のドアをノックする音とともに、いいにおいが部屋に滑り込んできた。

そのにおいが、ミラの腹を大ボリウムでならした。

「…ミラ、なにかあったのかい？いつものミラじゃないね」

と、リオルの声がドアの向こうから聞こえてきた。

別に、なにもないよ。とウソをつこうとしたとき、リオルはいった。

「ご飯たべられたからだろう？…少しだけど、とっておいたのを持って来たよ。」

「……」

違う。ぜんぜん違う。リオルってこういう事には敏感なのに、最後の最後でズレてるよなあ。

それに、そんな事でへこむわけないんだけどな。まあ…めんどくさいからいいや。

「ドアの外においておくから、食べなよ。またご飯たべられなくなったら今度は遅刻しちゃ

だめだよ、じゃあ」

そういつて、リオルはドアの前に、ご飯をおいて去っていった。

ミラはリオルがさっていつてから、5分くらい経ってから、ご飯をとりに行った。

ご飯は、ピザ6切れだった。ミラは、それを2分で食べた。

「…ふう」

ミラはご飯を食べ終わった後、仰向けに寝転んで天井を満足そうに眺めた。

リオルの気遣いのおかげで、さっきまで自分を覆っていた重い空気

が、少しだけ晴れた気がし

た。

別にいい。私はなにも気になんかしてない。もう、大丈夫。

少しして、ミラは満腹によって生まれた、超強力な睡魔によって、夢の中に沈んでいった。

思い出(後書き)

…ふう久しぶりにかけました。

今回は、久しぶりに出てきたリオルが活躍ですね。

主にミラのご機嫌とりw

次回は新キャラを出すか、トーラについて書くか…

ですね(=□=)

次回も読んでください☆

オスカー

そこは、シンプルだが、上品な部屋だった。

落ち着いた色調の木造家具。穏やかな海を描いた絵画などが、丁寧に飾られてあり、暖炉は静

かに燃えていた。

その部屋に一人の男がいた。

年は、20代後半だろうか。肩まである黒髪に、金縁の片眼鏡を掛け、上等そうな服に身を包ん

でいた。それら全てが、彼が身分の高い存在だということをうかがわせた。

その男は静かに紅茶を楽しんでいた。茶葉は最高級のものらしく、香りはすばらしかった。

―と、その時、この部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「どうぞ」

男は、ドアの方に眼を向けずに、そういった。

そして、男が返答を返して3秒ほど経った時、『失礼します』という声とともにきっちりスーッ

を着こなした一人の女性が、分厚い紙の束を山のように抱えて、部屋に入ってきた。

「失礼します、社長。今週の各支部からの報告書と貴方様あての手紙、1通をお持ちしました。」

その女性は、男に事務的にそう告げると、書類と、手紙を彼の前にある机にどさっと下ろした。

た。

「ご苦労様。行っているですよ。」

男は、紅茶を置きながら女性にそう告げた。

女性はすぐに出て行き、部屋が静かになる。

男の名はオスカー。ここ英国を本部とした、大手貿易会社『レイン』の若き社長で、全世界に

支部を展開したグローバルな営業を手がけている。独自のルートから手に入れた珍しい物から

日常品まで幅広い品物を扱っており、利益も半端ではない。その利益のほとんどを福祉に惜し

みなく提供している――それが表向きの彼の姿だった。

だが、本当は違う。福祉なんぞに寄付などしていない。ある計画のために支部に目的のものを

『貿易』目的として搜索させ、本部で情報収集し、支部に伝えていく。

彼の会社自体が計画のためだけに作られたものなのだ。

男―：オスカーは紅茶を一服してから、仕事にとりかかった。

目の前に積みあがった書類の山にどんどん目を通し、はんこをぺったん、ぺったん、と押して

いく。無駄な動きは一切なかった。

そして、しばらくして書類の山を完全に片付け、手紙に手を伸ばした。

便箋の表に、朱色のはんこで『オーストラリア支部』と押され支部長のサインが裏に書かれて

あった。

オスカーはその手紙を手馴れた手つきで開け、中の手紙を読んだ。

しばらくして、オスカーの瞳がかすかに見開かれた。口元には笑みを浮かべて。

「ようやく見つかりましたか…待ちわびていましたよ」

オスカーは手紙を暖炉に放り込み、椅子から立ち上がった。暖炉の手紙はすぐに燃えきった。

「…これからも計画を実行するため、支部を上手く活用しなくては、あの計画のために」

いまや彼は英国をはじめとする数々の大国にまで影響を与えるほどの権力を実質的に握っていた。

た。

ワイロや献上品。大国へ寄付。自身の会社。それらを駆使して掴み取った結果だ。

そう思うと、自然と笑みがこぼれた。

誰も自分をとめることが出来ない。誰も。自分に敵う者などもない。

オスカーは窓の外に広がる海を眺めた。海はさっきまで穏やかだったが今は重たい雲に覆われ

て、波も高くなっていた。

「残念ですね。外に散歩でもいこうと思ったのですが…天气が悪い」

そう、オスカーがつぶやいた瞬間、静かに雨が降り出した。

オスカー（後書き）

ついに、物語を揺さぶりまわしてくれる、キャラの登

場です（＞w＜）／

ほんとこのキャラがないとこの先かなくなってきた

ちやうのですよ…w

そのくらい重要な存在です。たぶん…アージュの次くらいに大事。

これから、やっと流れに乗れそうです。話の流れに。

では、次回は…一週間後くらいに更新しますw

また見てください★

赤い旗

海賊は朝日とともにおき始める。これは海賊達の習慣だ。

アージュたちとて例外ではない。

海賊島 2日目

「はーい、みんなきょうもげんきかい？」

銀髪を爆発させた姿で、アージュは甲板に集まっている船員全員にそういった。

『サイコーに元気でえーす』

と、船員全員が、眠気眼で、だらしなく返した。

ドリーム・パール号の朝は挨拶で始まるのだ。

「んじゃ、点呼しマース」

アージュはそう言うと、深々と息を吸い込んだ。

「ゴウ、ディアン、トルトン、リオル、カイ、マイ、ミラ、トニー
！」

『へえ〜い』

全員が一度に返事を返す。

アージュは、満足そうにうなずくと、今日の予定を話し始めた。

そして、食事もとり終わり、全員がようやく本格的に目覚めだした頃…

一隻の船が、水平線の向こうから、どんどんこっちにやってきた。

「船長。船が来たよ。ほんとにココって海賊がよく来るね」

ミラがうれしそうに、船を指差していった。

「んー？どれどれ…」

アージュがミラの背後からやってきて、ミラが指差している船を認めると、たちまち

表情を硬くし、銀色の双眸を細めた。

「・・・どうかした？アージュ」

ミラが問いかけると、アージュはあわてて表情を崩した。

「なんでもない。ただ、厄介なのがきちゃったなあ……って思ってたさ」

ミラは改めて、あの船をみる。船の赤いマストがかなり目立った大きな船だ。

「……あの赤い旗をしているのはね、昔、こっちのフツーに航海したりしてる海賊と

いざこざあった海賊なの。今は一応協定は結んでるし、島もこうやって開け放してる

けど……島の中で結構、こっちの派閥とケンカとかしちゃうのよ。」

「……そうだったんだ」

初耳だった。昔、海賊のなかでそんな事が起こっていようとは思っても見なかったのだ。

ミラのような一般人からすれば、海賊というのは『宝探を探しまくる人々』というイメージ

ジがあったので、赤い旗の海賊達の存在は正直、驚くことだった。

「だから、赤旗の海賊を見かけたら、早めに遠ざかること。」

「うん」

ミラがそういうと、アージュは微笑んだ。

(あ…れ…?)

ミラはアージュの顔を凝視した。何か違和感があったからだ。

「…どうしたのよ、ミラ」

「あ…別に何にもないよ」

ミラはそうとだけ言うと、足早にアージュから離れた。

気づいてしまったのだ。あの時微笑んだアージュの瞳に悲しげな色が浮かんでいた事に。

赤い旗（後書き）

：フフフフフ

ようやく書けたぜッ！！赤い旗の海賊についてッ！！

これまたこの物語のクライマックスやらに深く関わる物なんです。
まだまだこの物語は続きます。

次回もみてくださいね☆

ゼルフオンとアージュ

午後になって、パール号一行は、下船して島で自由にしていることになった。

ミラは、マイとアージュと女の子どうしで行動することにした。

がやがやと、人々の活気にあふれた大通りを歩くのはなかなか楽しく、自然と面白い物心も

くすぐられた。

「ねえ、あれ見てくださいよ。あんなにお菓子が…おいしそうですね…ね、アージュ」

「わあ…凄くかわいいネックレス…ほしいなあ…ね、アージュ」

マイとミラにはさまれて『ねえ、買って』という視線を自分に向けられているのを感じ、アー

ジュは両脇にいた二人に軽くチョップを繰り返す。

「物ほしそうな視線をむけるなっ！ちゃんとお小遣い上げたでしょ！？」

アージュがしかると、二人はそれぞれ舌打ちしたり、がっかりしたようにうなだれた。

「まったく、油断もすきもないわね…」

アージュが自分のお財布をポケットの奥深くまで押し込み、そうつぶやいた。

その瞬間、両脇の二人からおながスゴイ音量でなるのが聞こえた。

『……』

マイとミラが恥ずかしそうにそっぽを向く中で、アージュは小さく笑う。

そして、一言。

「ここは船長として、おごってやろうじゃない」

アージュは近くにあった、ピザの店に入った。ミラはピザをあまり食べたことが無い様で、

かなり嬉しそうだった。それにはアージュも嬉しかった。

しかも、食べたピザがかなり美味しかったので、アージュはかなり上機嫌になった。

しばらくして、3人とも食べ終え、んじやそろそろ出ましょーかと立ちあがったとき――

「アージュー!!」

澄んだきれいな声が店内に響き渡り、店内にいた人たち全てが、声のした方へ視線を向ける。

そこには、瞳と同じ色の、薄めの茶髪をツインテールにした少女が――アージュと同じくらいの少女

が、腰に手をあてて仁王立ちしていた。

その少女は、店内の視線をものともせず、つかつかとアージュの方へ歩み寄る。

「クレアじゃない。ひさしぶり」

「ひさしぶり、じゃないですっ!! あなたまた『あの方』と一緒にの時期に来るなんてっ

抜け駆けですかっ!？」

クレアはアージュの挨拶には答えず、そう叫ぶ。それを聞いたアージュは、『うげえ』と眉を

寄せた。

「クレア、それは誤解だって何度も言ってるはずよ。」

「うそおっしゃい!! 『あの方』はそう認めました。なのにあなたは否定する…本当のことを

言ったらどうなんです!？」

その言葉にアージュは、椅子からずり落ちた。そして『うそおっ！？』と叫ぶ。

そしてまたギャングヤンとクレアと言い争う。店内のお客はそそくさと退散していく。

マイはその状況に慣れているようで、のんきにお茶のお代わりを頼む。しかし、ミラには全く

理解が出来ず、おろおろと様子を見守る。

その様子を見かねたのか、お茶を手にしたマイはミラに耳うちする。

『あの人はですね、アージュの幼馴染？・・・みたいな男に、恋してるんです。んで、そのヤ

ローは、アージュにちよっかい出すようなガキでして…そのちよっかいがこういった、ケンカ

の原因になるんです』

「へ…へえ」

ミラは、感慨深げにつぶやいた。

（アージュ、意外と大変なんだ…）

ミラがそう思っている間にも、アージュとクレアの口論は続く。

「だ・か・ら！ちがうっていつてるでしょ！？」

「『あの方』が言ってたから間違いありません！！」

「なによ、それっ！！理不尽よ！！」

呆れを通り越して、感動を覚えそうなほど口論は長く続く。

このまま止めなかったら何時まで続くんだろう。試してみたかったが、この店の店長が、

『いい加減にしてくれっ！』とでも叫びだしそうだったので、思いとどまった。

いけない、魔がさしそうになってしまった。店長のためにも二人を止めなければ。

ミラがそう思って、二人を止めようと時。店のドアがぎいっと音をたてて開いた。

それに気づいたのか、アージュとクレアは口論をやめて、視線を向ける。

ドアの所に一人の少年が立っていた。濃い金髪に海を映したような深い蒼の瞳が、

印象的な二十歳くらいの少年で、かなりの美形だ。この島にいるのだから、海賊関係の人だと

わかるが、余裕そうな笑いを除けば、どこぞの裕福な家庭の子息

と言っても通じそうな

感じだった。

「あゝぜ、ゼルフオン様！」

クレアは、少年に向かって、驚いたように声を上げた。顔がとても赤い。

この人がクレアの言う『あの人』か。

「なに争ってたの？」

ゼルと呼ばれた少年は、アージュのほうに歩み寄ってニツコリと微笑む。

アージュは、舌打ちしそうになるのを辛うじてこらえた。

「それよりゼル、クレアにでたらめ言うのやめてくれない？ いいかげん迷惑なの」

アージュはめいっぱい冷たく言ったのだが、ゼルはものともしてない。

「えー、いいじゃん。おもしろいし」

「……あんただけでしょ！？面白いのはっ！！」

「それに、誤解されるだけでしょ」

「だけじゃないし、誤解されるのも胸クソ悪いのよ!!」

「相変わらずシャイだね。クレアもそうおもうよね」

「えっ!?!…えーっと」

いきなり、ゼルに話をふられ、クレアはうろたえる。顔がいつきに真っ赤になる。

また、口論がつづく。しかも、ゼルとやらの登場でグレードアップ。

「…マイ、私止めてくるね。オジサンがすごくかわいそう」

「ですね…任せます。頑張ってくださいね」

ミラはマイの熱い(?)声援を受け、アージュたちの方へ歩み寄ると、ゼルとアージュの

間に飛び込んだ。

『ストップ!!』

「ミラ!」

「だれ、この子?」

アージュの驚く声とゼルの言葉の中で、ミラはふとカウンターのおじさんのほうを見る。

おじさんは、にかつと笑って親指を立てた。ミラも思わず返す。

「ねえ、名前なんていうの？」

上から声がして、振り向くとゼルが相変わらず余裕そうな笑顔でミラを見ていた。

「…ミラですけど」

「そう、オレはゼル。ゼルフォン・クォーツって言うんだ。よろしく」

ゼルは自己紹介をして、ミラの頭にポンっと、手を置いた。

なんだか、不思議な雰囲気の人だ、とミラは、密かに心の中で思った。

「ミラは髪だけじゃなく瞳も漆黒なんだね。黒髪は結構いるけど…瞳も漆黒ってここら

へんではあんま見ないよね」

そうなんだろうか…

と思いつつ、ミラは答えた。

「父譲りなんです」

そういうと、ゼルは何か思うものがあつたのか、懐かしそうに微笑んだ。

「そう…大切にしなよ。またね。アージュもクレアも」

ゼルは、そういい残して店から出て行った。

「わ…私も、おいとまします!」

クレアがそう声を上げ、急いで店内をあとにする。ゼルを追いかけにいったのだろう。

「やっと、行ってくれたね。アージュ」

「ええ…」

そう答えるアージュの顔はとっても疲れていた。

「ひどいめにあったわ…まさか、アイツが来てるなんて…どうりで町の女の子達がいつもより

華やかなわけね。クレアにも結局誤解されたまんまだし…」

「そんなに人気なの? えーっとゼルフオンさん」

「そうなのよ…!! ほんっと気にくわないわ」

「まあ、落ち着いてください」

ゼルフォンがさった後、ミラとマイはのほほんとお茶をしながら、アージュの愚痴に付き合っていた。

（どうしてアージュはゼルフォンさんのことが嫌いなんだろう…？）

ふと、ミラは疑問に思ったが今聞くと止まらなくなりそうなのでやめておくことにした。

でも、本当はアージュはゼルフォンさんのことが好きだったりして。

そうだったらいいな、と思いながらミラは静かに紅茶をすすった。

ゼルフォンとアージュ（後書き）

かなり…久しぶりの投稿となりました…

なかなかゼルフォンのキャラ設定が上手くいかなくて…（言い訳）

で、もうこれからは2週間ごとの土曜日に投稿することにしました
んで、

みなさま2週間ごとにお越しくださいますえw

過去を握る少女

アージュの愚痴を聞くこと30分――

やっとさすがに落ち着いたのか、彼女は美味しそうに紅茶を飲んでいた。

さっき来たお菓子のシフォンケーキもとても美味しいので、彼女もすっかり

ご機嫌になったようだ。

「さて、これからどうする？これからもう船に戻る？」

アージュは紅茶を飲み干すと、そう切り出した。

「そうですねえ……もう夕方になりますし」

「うん……そうだね……」

ミラもマイに同意したとき――

店の外に、見覚えのある少年が路地裏へと入っていくのが見えた。

あのぼさぼさの栗色の髪と瞳はカイだ。手に数本の花を握っている。

また、あの岬に向かうのだろうか。

そう思った瞬間、勝手に足が動いたような気がした。まるで何かに

押されたように。

不思議に思ったと同時にミラは自分の意思に関係なく言葉を発していた。

「…ごめん、アージュたち、すぐ戻るからさき帰ってて」

「ちょ…ちょっとミラ！」

アージュの叫びにもこたえず、ミラはカイの後を追うべく、店から勢いよく出て行った。

「…なにしに行ったのかしら？」

アージュが不思議そうに小さくなっていくミラの背中を見つめながらつぶやく。

「さあ…なにか探し物でも見つけたんじゃないですか？」

マイは微笑みながら静かに答えた。

カイがひよいひよいと、路地を曲がっていくのをミラは気づかれな
い程度のスピードで

追いかけていく。

だが、カイは思った以上に速くすぐに見失ってしまった。

ミラはそれと同時に、自分の足から力がぬけるのを感じた。

「な…なんだったの？」

あの時、カイを見かけた時、岬に行くのかと思ったとき、追いかけると言わんばかり

に勝手に足が動いた。あまつさえアージュたちに『先に帰ってて』とまで。

（これ以上追いかけても仕方ないし…もう帰ろ…）

ミラはうつむいてそっとため息をつき、顔を上げた、するといつの間にか目の前に

透き通った薄い茶髪に驚くほどの白い肌、眼鏡の奥の翡翠の瞳が印象的な少女が

立っていた。

いつの間にか目の前に少女が立っていたことに驚きつつも、とりあえずペコリ、と

軽く会釈した。

すると少女が優しい笑顔を浮かべた。まるで子供を見守る母親のよきな笑顔だった。

その笑顔のキレイさに見とれつつも、挨拶するべきか、そのまま立ち去るべきか

考えていると――：

「どうしたんですか？こんな所でため息なんてついて」

「えっ：いや、ちょっと：いろいろとありまして」

『足が勝手に動いて、なぜか知らないがここまでたどり着きました』
なんて言えるはず

もなく、ミラはあいまいに答えた。

「そう：ここらへんは入り組んでるから迷わないように気をつけて
：」

「あ：有り難うございます」

ミラがお礼を言うと、少女はまた微笑んだ。けれども、その微笑み
もさつきと比べると

ずっと悲しそうだった。

「：？」

「：ごめんなさい、あなたは何も悪くないのに」

少女が悲しげにつぶやいた瞬間、強烈な風がドッと吹き込んできて
ミラは思わず

目をつぶる。

そして、気づいた頃には少女の姿は消え、ミラの目の前には一枚の絵が落ちていた。

「これって…」

ミラが拾ったその絵には、あの時カイについていったあの岬から見た夕焼けの

海が描かれていた。

過去を握る少女（後書き）

テストが終わったのでソッコー投稿してみました！

今回は短めですが、カイの過去を握ってる子が出てきましたw

さあて、どんな感じになるやら：作者は最数回までのあらすじは大体出来てるんですが、キャラの過去話とか、そういうのは本編に大きく関わっていくアージュ以外

はあんまり出来てないのが現状です（ー△ー；）

まあ：カイの過去編は書いてて楽しいですw

過去の片鱗

「ねえ、アージュ。これどう思う？」

その日の夜、アージュの船長室を訪ねたミラは、例の絵を見せつつそう切り出した。

「ほう、どれどれ……」

アージュはミラが見せた絵を受け取ると、感心したような表情を浮かべた。

「……へえ、すごいわねえ。そこらの画家より上手いんじゃない？」

やっぱりそう思うのか。

さっき、同じく感性がまともそうなりオルにこれを見せても同じようなことを言ったのだ。

今まで絵を見る機会がなかった、ミラでさえ上手いと感じる。

今日の消え方からして、あの子は幽霊に違いない。

あの子は将来有望な画家の卵の幽霊、なのだろうか？

そんなトコだろうと、ミラは納得しようとしたがどうにも納得できない。

もしかして、あの岬を描いていたって事は、カイがお花を捧げたお墓の主なんじゃ？

カイはあの時、トーラといていた。トーラという名からして女の子だろう。

そして、あの幽霊も女の子だった。年齢的にもカイに近い。

それじゃあ…やっぱり…

「ミラ？」

アージュが呼ぶ声でミラはわれに返った。

「えっ…あ、ゴメン。ボーっとしてて…」

「べつにいいわよ。で、この絵誰が描いたの？ミラ？」

「ちっ…ちがうよ!!…別の、女の子だよ」

あわててミラは否定した。もともとミラは細かい物事、たとえば裁縫などは大の苦手だ。

おばさんと暮らしていたとき、『家事全般は私に任せて頂戴』と引きつった笑顔で言われたのが

何よりの証拠だ。実際自分でも糸と布の無駄だと確信したほどののだ。

そんな自分がこんな絵を描いたなんて誤解されたら幽霊はきつと怒

り出すに決まってる。

「へえ、もう島で友達が出来たの？」

「…え、いやまあ…」

あいまいな返事をしつつ、心の中で『幽霊だけどね』と付け加えるのを忘れなかった。

「とにかく、感想ありがとねアージュ！おやすみっ！！」

ミラは、もう質問されたらごまかしきれないと悟り、絵をもぎ取るようにアージュから受け取ると

不思議そうな顔をしているアージュを背に、ダッシュで部屋を後にした。

明日、もう一回調べにいつてみよう、そう思いながら。

「…どうしたのかしら、ミラ」

アージュは、猛スピードで遠ざかっていくミラを見てポツリともらした。

まあ、いろいろとあるのだろう。

時刻を確認すると、もうすぐ真夜中、という時間だった。

…どうりで眠いわね。

彼女は固まった身体をほぐすように大きく伸びをして、ミラが来る前まで書いていた航海日誌を

片付け、机で小さく部屋を照らしていたランプの火を吹き消した。

とたんに、部屋は窓から差し込む月の光のみによって照らされだす。

アージュは静寂の中、古びた本がぎっしり入っている本棚の目立たない所に手を突っ込むようにして

一冊の本を取り出した。それは、極普通の革張りの表紙、擦り切れて表紙の文字がところどころ

読めなくなっているどこにでもありそうな、古びた本だった。

それを彼女は、月明かりが差し込む窓の下で開き、読み始めた。

悲しいのか、よくわからない表情を浮かべ彼女はページをめくっていき…やがて閉じた。

本をまた同じようにしまった後、ふと窓の外を眺める。

真っ暗な闇の世界で唯一輝いている半分にかけた月、その光で彼女の銀髪と銀の瞳は

白く、淡くきらめいた。

過去の片鱗（後書き）

：遅くなりました。サボり癖とゲリラ的投稿癖の持ち主というどうしようもない

作者の夢です（－w－）

今回もまだまだつづくぜ、カイの過去！！

しかし、それだけじゃつまないんで、海賊島の裏の部分とか、物語の核心を

もろにド突いてくる、アージュの過去をちよびつと、など
ちよこまかとオマケ的なものをいれますよw

：だから、見捨てないでっ！！（切実にっw）

とまあ、こんな感じでゆるーく、続いていくんで。

シリアス編になるのは、物語が3分の2くらいいってからですんで。
気長に待っててくださいいっつてことで、では？ また次回っ！！

★see you again★（・w<） 以上、あとが
き拡張版：でしたw

情報屋 『カリブの酒屋』

翌日の朝、ミラは朝食を胃に詰め込むようにして食べていた。

「…ちょっと、どうしたんですか、ミラ」

「なんでもない。はやく行きたいトコがあるだけ」

心配そうにミラに問いかけるマイに、ミラは事務的に答える。

今は早朝なので、食堂にいるのはマイとミラの二人だけだった。

いつもは小麦色の髪をポニーテールにしているマイも、今日はおろ
して

普段よりいっそう大人っぽかった。

「…アージュには一応いいましたか？」

「部屋に尋ねて、枕元で言ったけど…意識ないから聞いてな
いと思う。」

だから、トルトンに一応言ってきた」

「でしょうね」

そう言って、マイは苦笑した。

そんなマイのかおを見て、ミラはキレイだな、と思った。

アージュやマイは勿論、先日見たクレアという人も『海賊関係の人は美人が多いのか?』と

本気で問いかけたくなるほど美人だ。

ほんと、どうやったらあんなキレイになれるんだろ。

そう考えながら、マイを見続けると視線に気づいたのか、ちらりとミラのほうを見て

身じろぎした。

「な…なんですか? ミラ」

「なんにもない」

そういつて、ミラは水を流し込み、朝食を食べ終えた。

食器を片付けると、ミラは今度は地図とあの絵を片手に、活気溢れる町へと出かけていった。



海賊の島は、海賊達だけの島。

そのため、海賊が航海に必要な食料、飲み水、酒などがそろってい

る。

また航海に必要なというほどでもないが、海の状況、『赤い旗』なる海賊と国軍による

戦の様子などの情報交換も出来るのだ。

しかし、海賊は海賊。なかには血の気の多いものもいる。

なので、いくら島内での喧嘩を禁止していても、やっぱり起きるときは起きる。

便利とも、めんどくさいともいえるがこの島は国軍に検挙されない
ので、利用する海賊は

かなり多いのだ。

アージュは、午後、これからの航海に必要な食料や水や酒、その他
消耗品を買い出すべく、

ディアンとゴウとマイを連れて町へと繰り出した。

「まずはつと：ディアンとゴウは食料と水を。私とマイはお酒とか
担当ね。」

「わかりました。船長」

「えゝ：ワシもお酒係がいい」

と、ゴウは聞き分けがよいので文句を言わなかったが、いつまでも童心をかかえるディ

アンは文句をいった。

「文句を言わない。さ、いってきて」

彼女は有無を言わず、ディアンたちを出かけさせた。

そして、マイとともに大量の酒を買うため、行きつけの店に行こうとして……

「あれ、アージュじゃん」

タイミングを見計らったようにゼルフォンの声がした。

「うげえ……」

げんなりしながらアージュが振り向くと……

ゼルフォンの後方5m程度の距離を保って着飾った乙女達が殺気をほとばしらせているのが

嫌というほど見えた。

「……何の用？ からかうのはいい加減にしてって昨日言っただけだ」

「え……そんな事いつてたっけ？」

最大限に冷淡に言い放ったのに、ゼルフオンはけろっと受け流す。

それが、アージュの神経を逆なでしたが、ここで言い争うと本気で後ろの乙女達に

殺されそうなので、ぐっと我慢した。

お願いだから、あの子達に恨まれるからどっかいて…!!

そんな彼女の願いを打ち砕くようにゼルフオンはさらに近づいてきた。

「ねえ、アージュたち今からお酒買いに行くんでしょ？俺もなんだ、奇遇だよね」

「ゼル…!!アンタ聞いてたわねっ」

「んゝ何のことかな」

人の話を盗み聞きしておいて『奇遇だ』などとぬかすゼルは、どんな乙女も落としてしまえ

そうな、極上の笑みをアージュに向けた。

その直後、乙女達が鬼のような形相を浮かべてハンカチや手袋を力任せに引き裂く音が

アージュの耳に届いた。

はやく、ゼルを追い払わないと…!!

アージュはこほん、と咳払いして、

「ゼル：後ろの女の子達は？お友達なんじゃないの？早くいったら？」

と、願いを込めて言った。しかし、そんな願いも叶わず、

「別に違うよ。ただ俺の後をつけている一部の女子達だよ。もしかして

妬いてんの、アージュ？」

「：んなわけないでしょっ!？」

むしろ逆効果に終わってしまった。

私がこの島であんまり女友達がないのは絶対こいつのせいだわ：

上機嫌のゼルフォンに引きずられつつアージュは心の中でゼルを呪った。



一方、ディアンとゴウの二人組は、薄暗く、入り組んだ路地を歩いていた。

「で、なんで買い物も済ませずにここにくるんです、ディアンさん」
ゴウは不思議そうに、隣を歩くディアンに尋ねた。

「まあ：ちよつと昨日来た『赤い旗』の情報がほしくての。それと
買い物前に来たの

は荷物がスられそうだったからじゃ。」

と左の方へ目配せした。ゴウがそちに目をやると薄汚れた格好をした少年達

が2・3人獣のような目でこちらを見ていた。

どこからどういう経緯でそうなったかは知らないが、大英帝国、イギリスにも

スラムがあるように、ここにも貧困にあえぐ人はいる。

そういう者達はこの薄暗い路地に身を潜め、生きていくために牙をむく。

そんな所で、大荷物を抱えて歩いてた日にはそれこそ集団で襲われるだろう。

「…なるほど、理解しました。ですが、こういうのは気分いいものじゃありませんね。」

あの子達を助けたいんですが」

「まあな、でもそんな事してたらすぐにパール号が養える人数を超えるわい」

「同感です」

そんなことを話しているうちに、小さな灯りがついている『カリブの酒屋』と

何のひねりもない店名が書かれてある小屋が見えてきた。

ここは、一部の海賊達しか知らない酒屋で、情報屋が常にいる。

そこで、情報を買ったり、集まっていた他の海賊達と情報交換したりする。

ディアンがドアを開けて中に入ると、そこには、数人の人間がいて、葉巻の煙がかなり

充満していた。

「いつきても、ここは葉巻の煙で一杯じゃな…むせそうじゃわい」

大の葉巻嫌いのディアンは顔をしかめて、そうつぶやく。

その時、

「おや、ディアンとゴウじゃないか、久しぶりだね。」

と一人の初老の女がこちらに歩み寄ってきた。

落ち着いた色のスカートをはき、白の毛糸で編まれたガウンを羽織っている。

そして勝気そうな緑の瞳に、髪は白髪。年齢を感じさせない程しわの少ない肌。

「ごぶさたしてます。エレンさん」

ゴウは律儀に初老の女―エレンの頭を下げた。

「ああ、久しぶり―：ほんと、いつもゴウは会うたびに礼儀正しいね。それに比べてディアンは

いつ見てもちゃらんぽらんだね。一度くらいしっかりした所を見てみたいモンだ」

エレンはゴウには優しい笑顔を浮かべてたが、ディアンには打って変わって意地悪そうな笑み

を向けた。

ちくちくとトゲのあるエレンの小言を、ディアンはうるさそうに顔をしかめてきいていた。

「おーおー：お前も元気そうじゃな。前より小言がパワーアップし

とるわい」

「皮肉も相変わらずだね」

エレンは口の端をあげて、笑う。

そして、手招きして、店の奥にある、カウンターに二人を座らせた。

「さて、葉巻嫌いのディアンがセットでついてきたって事は、それなりのネタを

渡さないかね。まあ、その分金はあるけどさ」

エレンは、言いながらカウンターで酒屋には似合わない紅茶を淹れ始める。

「お前は…昔、同士だったモンにまでがめついのか」

「商売だよ。それに、少しは安くするさ」

エレンは、紅茶を入れたマグカップを二人に手渡し、言った。

苦い顔で、皮肉ったディアンは、ふんと鼻を鳴らす。

ゴウは、そのやり取りを見て、目を白黒させた。普段、ディアンはへらっとした

印象が強いのに、エレンとのやり取りでは天敵にでもあったかのよう
うに、警戒し、

必要ならば、小言も皮肉も言う。いつもと全く違う一面が見えてくる。

…だぶん、昔っからエレンさんとかこういう風に喧嘩してたんだろうな。

そう考えているうちに、口げんかが発展し始めてるので思考をやめて咳払いをした。

「…とにかく、今回は昨日から停泊している、『赤い旗』についてお聞きしたいんです。」

「ああ…昨日の。入ってるよネタ」

「…早いですね。昨日の今日なのに」

ゴウが驚いたように言うと、エレンは紅茶を飲み干して、にんまりと笑った。

「伊達に、二十年も情報屋やってるわけじゃないよ。…で、奴らのどの情報がほしい

のかい？情報の量によって料金は変わるよ」

ゴウとディアンは互いに顔を見合わせると、小声で会話を開始する。

（どうするんですか、全部の情報っていったらかなりの大金払わなきゃならないと

思うんですが…）

そう言った後、ゴウの脳裏に前回の情報屋での出来事が浮かんでくる。

前はアージュと来ていて、そう多くはない情報量を聞いたとき、かなりの大金を

請求された。

これでもかなり安くしている方だ、とその後エレンに言われた。

実際、自分たちと同じくらいの情報量で2倍の金額を請求されている所を目撃した事

もある。

サービスして、あの金額。それも情報量を制限してだ。

なのに、情報全部聞かせてくれ、だなんていったら：

ヤバイ。かなりヤバイ。

たらたらと、冷や汗が出てきているゴウに気づき、ディアンは声をかける。

（どうしたんじゃ、ゴウ。顔色超絶悪いぞ？）

（い、いえ…なんでもないです。ただ、金額のことを考えてただけです…）

息も絶え絶え、といった様子でゴウは答えた。

(…察するに、とんでもない金額なんじゃない?)

(ええ…船長が怒り狂いそうなくらい)

アージュが怒り狂いそうなくらい、と言われてもディアンは普段から怒られてる

のでよくわからなかった。

なので、ゴウがどんなに止めさせようとしてもあまり効果がなかった。

(ま、今日の買い物代が吹っ飛ぶって事はないじゃろ)

とつぶやくなり、ゴウに反論する時間を与えないまま、エレンに向き直った。

「それじゃ、情報全部って事で頼む」

「ちょ、ちょっとディアンさん!!」

ゴウが悲痛そうに叫ぶが、ディアンは無視。

「あ、そう。ならこんなカンジの金額になるけど」

エレンはそう言って、指を5本立てる。

「ん、なんじゃ、たった5000ドルでいいのか?」

ディアンが驚いたように言うと、エレンは笑みを浮かべる。

その微笑みを見て、ディアンは一気に血の気がうせるような感覚に陥った。

―そう、この一見聖母の微笑みに見える、この笑顔は……

「なにいつてんだい、一本10万に決まってるだろう？」

…むかし、エレンが鬼のようなセリフを吐くときによく見るものだった。

後ろで、『言わんこっちゃない』といわんばかりに、ゴウのため息が聞こえた。

「あんた、それでも昔、アタシと同士だったろ？あたしの性格を忘れたのかい」

エレンがおかしそうに、笑う。それを見て、ディアンは肩を落とした。

「確かに極悪な性格じゃったな。失念してたわい…それにしてもお前、これでもサービスしてる

のか？ホントはお前、外道を極めた鬼じゃないだろうな？」

ディアンが半ば本気で尋ねると、彼女がおかしそうに答えを返してきた。

「そうだよ。知らなかったのかい？」

情報屋 『カリブの酒屋』（後書き）

今回は中学校生活最後のテストが終わったこともあっていつもよりかなり多めに書きました（－w－）

で、今回は新キャラが出てきましたね。エレンおばあちゃん。

このおばあちゃんは、昔はディアンと同じ船に乗ってた海賊でして、性格は超豪快、超極悪。

でも、島の子供達にはやさしい、と思われてる、スゴイおばあちゃんこのおばあちゃんはちよくちよく出てくることになるのでどうぞよろしくw

それではまた次回も見てくださーい（>w<）

再び

エレンに衝撃的な金額を言い渡されたディアンは結局、情報量を制限してもらった。

あの金額でやっと全部なら、手持ち金に見合うくらいの情報量なんてもう豆みtainなものだ。

「ほんとに、度胸と財布の小さい男だね。おまえは」

エレンが呆れたようにディアンにいった。

「うるさい」

反論する気力さえ失ったディアンは一言しか発言せず、そのまま机に突っ伏した。

今、エレンに情報を紙に書いてもらってる。書いている紙が手のひらサイズの所をみると、

かなり書くことは少ないようだ。

それをみて、さらに落ち込む。覚悟してたとはいえここまで少ないとは…

その時、遠くから何かの破裂音が響いた。しばらくしてなにやら怒鳴り声や悲痛そうな声まで

聞こえてきた。

大きかった声がだんだん小さくなっているの、たぶん誰かが追いかけているのだろう。

「喧嘩…ですかね？　ここらでは珍しいですが…」

「ずいぶん、悲痛な声が聞こえていたのお…まるで女の子みたいじゃ」

ゴウとディアンがのんびりとコメントする。

「っていうか、あたしゃ女の子だと思うけどね」

そういつて、彼女は書き終わった手のひらサイズの紙を差し出した。



時間は少し戻る――

「え…っと、ここだったような…」

ミラは薄暗い路地で小さくつぶやいた。

ミラは昨日あの幽霊にあったところに来ていた。

ここにすれば、また幽霊に会えるのではないか、と思ったからだ。

しかし、かれこれ一時間探し回っているが幽霊どころか人っ子一人会えていない。

ちょっと休も…

そう思い、ミラは近くに積みあがっていた木製の樽へとよじ登り、その一番上に座った。

その時ぐらり、と体が傾いた。

「へ…」

ガラガラッ ドスンッ!!

「う…いったあ…」

ミラは痛みに顔をしかめつつ、身を起こし辺りを見回した。

崩れ落ちた樽は運良くミラの上には落ちずに、周りに散らばっていた。

中には大破し、中身の水をぶちまけている樽もあった。

もし落ちてきてたら絶対ただではすまなかっただろう。

「はあ…落ちてこなくて良かった…」

ミラはそうつぶやき立ち上がろうとして…

「おい…そのガキ」

と、彼女の背後からどす黒い声が聞こえた。

「…え」

ミラが恐る恐る振り返ると、そこには長身の大男と、中肉中背の二人の男が立っていた。

二人ともずぶぬれで、粗末な服にはところどころ木片が付着している。

とくに大男の方は鼻血が出ていた。

ミラはその様子を見てじんわりと冷や汗が出るのを感じた。

「あのお…まさか、樽が直撃したんじゃない?」

そうであってほしくないと激しく祈りを込めながらミラは尋ねた。

「つたりめーだろうが…!! どうしてくれんだよ、俺なんか血い出てんだけど?」

大男は威嚇するようにドスの効いた声でミラに言った。

ミラはその姿に、思わず泣きそうになる。

(どうしよう、すごく怖いっ!!)

それでも、ミラは泣かないように必死で平常心を保った。

「あの、その、ごめんなさいっ!!」

平常心を保ってられる内に、とミラは二人に全力で謝った。

二人の男はなにも言わない。

何も言わないって事は…許してくれたのか…

などと沈黙を勝手にそう判断すると、彼女はすばやく回れ右をした。しかし、がしり、と男の一人が腕をつかんだので、逃走は失敗に終わった。

「…あの、まだなにか？」

ミラが弱々しく言うと、男たちは心底呆れたような顔をした。

「はあ？何言ってるんだよ。あれで許すわけねーだろ、出すモン出せよ」

大男がそう言っても、きよんとするミラに腹を立てたのか、大男は声を荒げた。

「だから、金だせて言ってるんだよ!!マジ大丈夫か、嬢ちゃん」

言って、大男が手を突き出す。

ミラは、絶句してしまった。ミラの故郷でも、ガラの悪い連中はい

たがここまでじゃなかった。

『お金で解決ッ★』という事なんてしない。もっと優しい(?)不良だった。

だから、全力で謝れば『しょうがないなあ…』などと言って許してくれるだろうと

思っていたのだが…

まさか、お金を要求されるだなんて…なんと恐ろしい人たちなんだろう。

ミラは一人で勝手に出てきたことをひどく後悔した。

「ほら、早く出せよ」

ミラはしぶしぶお財布を取り出すと、中を覗き込む。

昨日もらったお小遣いのほとんどを自分の部屋の木箱に貯金してきたので、今は5ドルしか

もってなかった。

これで助かるんなら安いもんだよね…

そう前向きに考えて、ミラは5ドルを大男の手のひらにしっかり乗せた。

「はい、どうぞ」

しかし、男たちの反応がない。不思議に思って顔を上げると、二人ともひきつった表情を

浮かべていた。

「…おい、これだけかよ？」

「はい。そうですが」

男たちが確認するように言ってきたので、ミラは素直に答えた。

その瞬間

『ふざけんじゃねえっ!!!』

二人の男たちは怒りの頂点に達したらしく、叫んだ。

「んだよ、このシケた金額はっ!!! ナメてんのかっ!?!」

「もっとだせっ!!!」

（そんな事言われても…!!! これ以上持ってないのにつ）

もはやなす術がない。こうなったら最終手段に出るしかない。

「あの…その…ごめんなさいっ!!!」

ミラはそう言い終わらないうちに走り出していた。

一瞬反応が遅れて、「待てコラァ!!」とか「このガキツ…!!」とか叫んで男たちも

ミヲを追いかけるべく走り出した。



で、現在。

ミヲは激怒した男ふたりに追いかけているのだった。

もし、追いかけている所が大通りだったら誰かが助けてくれるだろうが

あいにくここは裏路地だ。

それがわかっているのか男たちは追跡の手を緩めない。

「もうお金ないんですってば!!」

「んな事知るかっ!!」

「っつーか止まれよ!!」

ミラは男達の返答に思わず舌打ちしそうになった。

許してって言ってるのにっ…なんてしつこい人たちなんだろう!!

その時、右の角から突然、黒猫が飛び出してきた。

「うわっ…!!」

避けようとしてバランスを崩し、思い切り転倒してしまった。

それをみて、10メートル後ろの男たちが『しめた』とばかりにスピードを上げた。

ミラはあわてて身を起し、走り出そうとして…

(こっち…)

と、猫が飛び出してきた角から声が聞こえてきた。

はっとして声のした方を見ると、そこには探していたあの幽霊の女の子が

切羽詰った表情をして立っていた。

(急いで、追いつかれちゃう)

ミラはなにも考えず、急いで右の角へ飛び込むようにして走り出し

た。

その瞬間、ぐらりと体が傾いたような感じがして、回りの景色がゆがむ。

ミラは不思議な感覚に思わず立ち止まって、目を閉じた。

一分くらいそうしてただろうか。

ふいに、頬に風を感じて恐る恐る目を開くとそこは白い十字架がたたずむ

あの岬だった。

再び（後書き）

一ヶ月ぶりの投稿になりました（一w一）

明後日からテストなので…今ちよつと死にそうですがそれを乗り切ったら、バンバン書いていきたいです!!
ですから次回の投稿は…一週間後くらいですかねw

それでは、次回も見てくださいねっ（>w<）

終わってしまった物語

岬の先に白亜の十字架がたたずんでいて、その向こうで、太陽が海に飲み込まれ始めている。

この前カイとここに来たときに見たものと同じ、キレイな夕焼け。

その光景にミラは思わず感嘆のため息を漏らした。

「本当にキレイ…」

（うん。私も、生きていた頃この景色が大好きだったわ）

その言葉にはっとして、ミラは幽霊の少女の方に向く。

「それじゃあ…やっぱりあなたは、このお墓の人なの…？」

すると、少女は穏やかな微笑みを浮かべた。

（ええ。私は…トーラって言うの）

ミラはそう聞いた瞬間、自分の鼓動がかなり大きく聞こえた気がした。

この前来た時にカイがつぶやいた『トーラ』という言葉はこの子を指していたのだ。

そう思うとなんだか無性に悲しくなった。

その様子をじっと見ていたトーラはふいに口を開いた。

（ねえ、もしよかったら昔話に付き合ってくれるかしら）

「え…？」

（私とカイの過去の事…私は話してもいいって思ってる）

カイと…トーラの過去。ミラは聞きたいと思っても、はっきりと『聞きたいとは』

いえなかった。

仲間になってからまだ日の浅い自分が、勝手にカイの過去に踏み込むのはダメな様な気がした。

それでも、聞きたいと思っている自分はどうかしているのだろうか？

ミラはトーラの言葉に、静かにうなずきながらそう思った。



お話の始まりは二年前。

当時、私は11歳で、病を患ってたからこの町にある別荘に静養中だった。

私は画家になりたかったから、毎日のように窓からこの町の景色を

眺め、絵を描いていた。

一度は外に出て、自由に駆け回りたかったけど、私の病がそれを許さなかった。

もう、病は治らない。医者からはそう告げられていたし、家族もその言葉を信じきっていて

少しでも長生きさせようと身体に障ることは一切させてくれなかった。

私は、それがすごく悲しかったけど、両親の悲しむ顔を見るたびに『仕方のないことなんだ』

とあきらめていた。

そんなある日、この島に人助けをする海賊、『ドリーム・パール』号がこの港に来た。

と屋敷に使えていた召使がうわさしているのを聞いた。

そのうわさを聞いた私はいてもたってもいられず、とうとう屋敷を抜け出してしまった。

海賊といえば、血気盛んな野蛮人と教わってきた。

けれど、その『ドリーム・パール号』の海賊はそんな教えを覆すもの達。

だからどうしても気になって、しょうがなかった。

使用人に見つかったら一貫のお終い。だから慎重に、でもすばやく動いた。

けれど、そんな行動でさえ長年病に侵された身体はついていけなかった。

心臓が異様に跳ね上がり、それほど走ってもないのに息が上がった。

結局、港まではたどり着けず途方にくれながら今お墓が立っているこの岬に着いた。

そして、疲れきった私はその場に座り込んで、初めて見る光景に目を奪われてた。

その時

『どうかしたのか？』

と、背後から声がした。驚いてふりむくと、そこに一人の少年がいた。

それが、カイだった。

それ以来、わたしはカイと親友のように仲良くなった。

カイが『ドリーム・パール号』の船員で、奇数月の新月には必ずこの港による事になっていたから

その日は私は必ず岬にいつて、描いた絵を見せたり、カイの旅の話
を聞いたりと楽しかった。

でも、その反面、月日が立つに連れて、私の病はどんどん進行して
いき…

二年前、全てが終わった。

一つの後悔の念を残して。

終わってしまった物語（後書き）

約一ヶ月ぶりの投稿となりました（一w二）

カイの過去編ももうのこりわずか…!!

この後は、本格的に話に乗りそうですね（・ω・）
それではっ 次回も見てくださいw

彼女の願い

「…そう、だったんだ」

ミラはそういって、ため息をつく。その時思った以上に身体がこわばっているのに気がついた。

『話を聞いてくれてありがとう』

「…いえ、そんな滅相もないです」

さっきの話がまだ頭の中をぐるぐると回っているせいか、ついトーラに敬語で答えてしまった。

そんなミラを見て、トーラは優しい笑顔を浮かべる。死者とは思えない温かい笑顔。

そのトーラの笑顔を見た時、ミラの中に一つの疑問が生まれた。

「ひとつ…訊いても良いですか？」

ミラは静かにトーラの瞳を見つめた。大切な話をするときは、相手をしっかり見て話す。

それは数年前に、亡くなってしまった母から教わったことだった。

「もう、死んでしまっているあなたがどうして、幽霊となってこの

世にいるんですか？」

その時、トーラの表情が変わった。優しそうな笑顔から悲しそうな笑顔になった。

『……ねえ、少しだけ私のお願い聞いてくれる？』

ミラの質問には答えず、トーラは悲しそうな笑顔のまま、静かにそう言った。



「…ねえ、ゼルフオン。とっても聞きたいことがあるんだけど」

「ん？ なに、アージュ」

アージュの、殺気だった表情を笑顔で眺め、ゼルが答える。

「っなんで、こんな事になるのよ！？」

ゼル目当てにやってきた、着飾った乙女達に囲まれたアージュは酒屋の店内でそう絶叫した。

さっきこの酒屋にやってきたばかりなのにいったいどこで嗅ぎつけたのか分からないが、

あっという間に、沢山の少女達がゼルを取り囲んでいた。

（まったく…!!これじゃあまともに息すら出来ないじゃないっ!!）

アージュと一緒に連れてこられたマイは、『やってられません★』とだけ言い残して、

どこかへ行ってしまった。

その逃亡のおかげで、アージュはたった一人でゼルと酒屋に行かなければならなくなった

しかも、こんな大量の少女に囲まれて、息苦しいという状況を味わう羽目になっている。

「いやあ…：なあんか行く先々でこんな風になっちゃうんだよね」

「アンタといつも一緒にいる男たちは、さぞおもしろくないでしょうね…！」

どうりで、いつも街を歩くとき、一人なわけだ。

こんなに押し寄せるくらい、モテる男と一緒にいたら否が応でも惨めな気分になる

に決まってる。

その時、さっきからアージュとゼルフォンの言い争いを傍観していた乙女の一人がふいに

口を開いた。

「ねえ：ゼルフォンさん。あの、アージュとやけに仲がよろしいですね」

その言葉に、アージュは思わず、『うげえ…』とうめきそうになった。

そんなの、恋人かどうかと、遠まわしに聞いているようなもので、嫉妬心がビシバシ伝わってくる。

だから、アージュはゼルのせいで、散々貯まっている誤解をとくチャンスだとばかりに

いち早く、口を開いた。

「そんな事ないわよ。そう見えるだけで、ホントは全っ然仲良くないから。腐れ縁よ」

（これでもう、ゼルとは誤解されないはず…!!）

アージュがそう思った瞬間…

「そうかしら。すぐ否定するあたり、怪しいですわ」

「ホントは隠してるんじゃないくて？」

（……………は？ 何でそうなるのっ!?!）

口に出して、反論したかったが、ますます疑われそうなので不本意ながらも口をつぐんだ。

しかし…

「あら？ 反論しないんですか？」

「つてことは、やっぱり…！？」

黙ってしまったことで、かえって誤解を招いたらしい。

また、何人かの少女が口々につぶやき始めた。

（どこまで、勘違いすれば気がすむのよ…）

あまりに、思うように誤解が解けないので内心うんざり叫んだ。

どう、この試練を乗り切れればいいのか。誰か教えてほしい。

その時、

「違うよ」

と、今まで黙って成り行きを見ていたゼルが突然、口を開いた。

「まあ…じゃあゼルフオンさんがそう言うなら…」

「そうじゃなくて」

少女の安堵した声を遮って、言葉を発したゼルに、アージュを含め全員がゼルを注視する。

「そうじゃなくて、俺の片思いだから」

そういつて、その整った顔で、極上の笑みを浮かべた。

瞬間、歓声と悲鳴が入り混じった声が店内を揺るがした。



ゼルフォンの爆弾発言からはや十分たつが店内はいまだに騒がしかった。

そんな騒音の中、アージュはゼルフォンの胸倉をつかみ、怒鳴りつけていた。

「ど・う・し・て!! あんたはいつつもデタラメにそういうこと言うのよっ!?!」

鬼のように瞳から、殺意を放つアージュに激しく揺さぶられつつも、

「えー…だって事実だし、ねえ?」

と、『へらっ』とした表情でゼルは答える。

「アタシに同意を求めてどうすんのよっ!!—それより早くこの誤解を解いてっ」

「嫌だ」

「なんでよっ!! からかってるワケ!？」

「……さあ」

その時、アージュの中で何かが切れた。

「このっ…ばかゼルフォン!!」

彼女は怒鳴り声とともに、ゼルの横っ面に全力で平手を喰らわせた。あまりにも全力で平手を打ち込んだので、ゼルの身体は店のドアをぶち破り、外の大通りまで

吹っ飛ばされた。

「ちょ…アージュ、落ち着け…コレは…死、ぬ」

「私の怒りの原因を作ったアンタに情けをかけるほど、優しくはな
いんでねっ!」

腰に手をあてて、ふんぞり返ったようにアージュは叫ぶ。

その様子を、通りを歩いていた子供がじっと見ていたが、母親らし
き人に

『あんな、大人気ない人になっちゃダメよ』とたしなめられた。

「あゝあ、大人げ無いんだって」

「うっさい!!」

アージュは、顔を上げて、ニヤニヤと嫌味たらしく言ってきたゼルに噛み付くように

言い放った。

その時―：

「あつ…ここにいたぞっ!!」

と、酒屋の後ろの路地から、男の怒鳴り声がした。

続いて、悲痛そうな少女の声も、聞こえてくる。

「ご、ごめんなさいって、言ってるじゃないですかっ」

あまりにも聞き覚えのある声に、アージュは眉を寄せ、ゼルは声のしたほうへ

顔を向けた。

「今のって…」

『ミラなんじゃ?』と、アージュが続けようとした瞬間、路地からミラが

半べそかきながら脱兎のごとく、飛び出してきた。

「ごめんなさいってばあゝっ」

そのすぐ後を二人の男が追う。

「うるせえっ、どんだけ痛かったと思ってんだよっ!!」

「治療費払えっ!!」

「!!」

「あ…おい待て、アージュッ!!」

その光景を見たアージュは、ゼルの制止を無視して、走り出した。

それにいち早く、男の一人が気づき叫ぶ。

「おい、あれっ!!」

「え…!?」

もう一人の男が、振り向くと同時に、アージュは走ってきた勢いを
使って最初に

気づいた男の鳩尾に、剣の鞘をのめり込ませた。

「がっ!!」

「ぐおっ!?!」

鳩尾に攻撃を喰らった男がもう一人を押し潰し、二人とも地面に勢
いよく倒れこんだ。

ヘンな悲鳴が聞こえたので、ミラがビクリして振り返り、アージュを認めると

目を見開いた。

「ア、アージュッ!!」

「大丈夫ミラッ!?、どこも怪我してない?」

アージュはミラに駆け寄ると肩をつかみ、心底不安げに、尋ねた。

「うん、大丈夫」

アージュの勢いに気おされつつも、ミラが答えると、安心したらしく肩から

手を離れた。

「よかった…」

アージュは、そう言って頬を緩めて笑う。

最近、ゼルのせいで、怒った顔とか、困った顔しか見ていなかったせいか、アージュの

穏やかな顔は見ていて新鮮だったし、女神のようにキレイだった。

貴族の令嬢みたいに、豪華でかわいいドレスをきて、髪を結ったら、ものすごくキレイだろうな。

そう思うと、誰かからドレスを借りて着せてみたくなった。

「それで、ミラ。あなたどうしてこんな野郎に追われてたの？」

アージュの言葉にわれに返ったミラは、虚をつかれ口ごもった。

「えっ、えっとそれは…私があの人たちの上に樽を落としちゃって」

「それで、治療費払えって？」

「うん」

「そう、へえ…なら」

アージュはにこりと笑う。キレイな笑顔なのだが心なしか怖い。

ミラを含む、その場にいる人全員がそう感じた。

アージュは笑顔のまま気絶している男達につかつかと歩み寄り、その内の一人の襟首をつかみ、

がくがくと激しく揺らした。

「ほら、起きなさい」

しばらく揺らしていると、男は気がついたらしく『うう…』とうめき声をもらす。

男は、意識がはっきりしてくると、目の前にアージュがいることに気づき、

『ヒッ』と短く悲鳴を上げた。

瞬間、アージュは氷のような冷たい瞳で男を睥睨した。

「見た所、鼻血以外のケガはないわね。なのに、散々うちの大切な船員を追っかけまわして

くれて…」

そういつて、うつすらと口元に笑みを浮かべる。だが瞳は冷たいままだ。

アージュの表情に、男は勿論、ゼルもミラもギャラリーにも、冷や汗が浮かんだ。

彼女は、右手で男の襟首つかんだまま、空いたほうの手で腰のあたりに付けてあった小さな

布袋をつかむと、男を放した後に、それを放り投げた。

「今回は、見逃してあげる。ほら、受け取りなさい」

男は、布袋を引っ掴むと、まだ気絶していたもう一人をたたき起こし、駆け出した。

「次、ウチの船員に手を出してみなさい。ただじゃおかないわよ」

男の背後に向かって、アージュは最後にそう言った。

直後に、男は走る速度をかなり上げ、あっという間に走り去っていった。

男達が立ち去った後、周りのギャラリーが『終わった終わった』などと言合いながら

去っていき始める。

3分もすれば、ギャラリーの半分は立ち去っていた。

「アージュ：ごめんなさい」

ミラは、ポツリと言った。

「そんな、気にしないでいいのよ。私はミラにケガがなくて安心したわ」

それでも、とミラは思った。

結局、自分のためにお金を支払わせてしまった。悪いのは、他でもない自分だ。

そういう考えが顔に出ていたのか、アージュは微笑み、口を開く。

「ほんとに、大丈夫よ。私、あいつらにお金なんて一つもあげてないもの」

彼女の言葉に、ミラはきょとん、とした。

「え、でも…」

たしかに、布袋を渡したはず。そう続けようとしていたミラの目の前にアージュが何かを

かかげて見せた。

それは平べったい石だった。海岸などでよく見かけるもので表面がつるつるしている。

「い、石…？」

「そ、石よ。海賊はね、賭け事のとときとかズルする奴が多いのよ。だから、私はいつも

『対・ズル用』の道具持ち歩いてるの…この石、形が硬貨に似ているでしょう？だからこれを

あいつらに渡した布袋に入れといたのよ」

「す、すごい…よく気づかれなかったね」

「まあねー…あいつら焦っていたからね。騙しやすかったわ」

そう言って、アージュはにっこり微笑んだ。

「……」

ミラは、呆れつつも、あのしつこかった男達二人がなんだかものすごく可哀相になってきた。

「さ、帰るわよ。ミラ」

アージュが笑顔で言って、手を差し出す。

ミラは、おずおずとその手をとった。

二人で、顔を見合わせて、笑ってしまう。

こんなの、まるで親とその子供みたいだ。

（ありがとう、アージュ）

ミラは、笑顔のアージュに連れられつつ、そう思った。

彼女の願い（後書き）

こんにちは（・w・） 皆さん元気でしたか？

さて、今回は2ヶ月と間があったこともあって、かなり長めの物をお送りしました（－△－；） もっと、早く書けるよう頑張ります
W
投稿を待っていた方：いたら、ごめんなさい（土下座）

で、次回の更新は：一週間後くらいです。夏休みですしねっ（＞w
＜）！！

それでは、次回も読んでくださいっ！！

ゼルフオンとディアン

アージュと、ミラが仲良く手をつないで帰っていく。

その様子を、地面に倒れこんでいたゼルフオンは見ていた。

アージュは、笑顔でミラとおしゃべりしている。

（あんな顔、俺の前でなんかしたことねえぞ…）

そう思うと、理不尽だとわかっているが、ミラが憎らしく思えてくる。

不機嫌な顔で、地面から起き上がろうと思ったとき、背後に気配を感じた。

見上げると、紙袋を抱えたディアンが意地悪そうな笑顔で立っていた。少し離れた

ところにはゴウがディアンの2倍くらいの荷物を抱えている。たぶんディアンに

押し付けられたのだろう。

「また、派手にやったようじゃの。ゼル」

「…なんです、見てたんですか？」

「まあ、あれだけ騒いでいればな」

ゼルが、不機嫌そうに訊くと、ディアンは悪びれた様子もなく答えた。

「……」

ゼルは無言で怒気をにじませながら、立ち上がり服の汚れをはいた。

「…お前は、ほんとに不器用な奴じゃな。見ててうずうずするわい」

「はぁ…不器用？」

そんなの言われたのは、生まれて初めてだ。むしろ、器用だと言われたことが

ないような気がするくらいなのに。

それなのに、このじいさんは、『不器用だ』という。

「俺のどこを見てそう思われたんです？」

セルフオンはぶすつとした顔で訊ねた。すると、ディアンはじつと、セルフオンを見る。

セルフオンは、ディアンに見られるのが苦手だった。

ディアンの瞳は、全てを見透かしているようで嫌になる。思わず、セルフオンは

ディアンから目をそらした。

すると、なぜかディアンが笑い始めた。何がそんなにおかしいのか、と言うくらい

笑っている。

ディアンは『ひゝゝゝひゝゝゝ死ぬ』などつつぶやきながら、かなり笑ったあと、

涙をぬぐった。

「そこじゃよ、そこ。お前さんの性格じゃ」

「…俺の性格？」

「隠したいモノの隠し方がぎこちなくて…見てて面白い」

その言葉に、ゼルフオンは目を見開いた。

「……」

「どうしたんじゃ？ゼルフオン」

ゼルフオンが、目を見開いている様子を面白そうに見ながら、ディアンは言った。

ゼルフオンはしばらく、黙っていた。しかし、堪え切れなかったようにゼルフオンは

苦笑した。

「…つとに、アンタには昔から、敵いませんよ」

「当たり前じゃ。ワシの方がお前の3倍近くは生きてるんじゃないぞ？」

そう言って、ディアンは紙袋に入っていた林檎をかじった。

ゼルフオンは何も言わない。ただ、苦笑いをしているだけだ。

ミラが追われているとわかったときのアージュの顔は焦燥感と怒りとが入り混じっていた。

どうしてそこまで、ミラが大切なのか？

見る人がそう問いかけそうなくらいに、アージュは必死だった。

まるで救いを求めるかのように、ミラを守る。

（それは、きつとあの時の…）

そう思うと、ディアンはため息をつきたくなった。

「本当に…アージュはあいつの言葉に囚われすぎているな」

ディアンがつぶやくとゼルフオンは一瞬表情を強張らせたが、やがてすぐに

爽やかな笑顔を浮かべた。

「…ええ、多少ムカつくくらいですよ」

ゼルフォンが言うと、ディアンは呆れた表情を浮かべた。

「お前は、独占欲が強いな。先が思いやられるわい」

「それはどうも」

「…ふん、可愛くないガキじゃの」

ディアンは、そう言った後、食べ終えた林檎の芯を石畳の上に投げ捨て、歩き出した。

そして、後ろにずっと控えて様子を見守っていたゴウは、二人の会話の意味がわからず

混乱しながらも、ディアンの後続く。

「ほんとに…嫌なじいさんだな」

小さくなっていくディアンの後姿を見つめながら、ゼルフォンはつぶやき、苦笑した。

ゼルフオンとディアン（後書き）

皆様こんにちは（・w・）

夏休みだぜっ！！とか思ってたら、補習があると言う事実を知ってかなり落ち込んでいる作者です

今回は、ちょっと物語に関わってくることを出してみました。

『こんなに…書きちゃってバレないよね？』

とかちらり、と思いましたw

メチャクチャ勘の良い人が読者の中にいないことを願ってます（wー）

ちなみに、今回ディアンとゼルフオンの組み合わせが出ましたが…実を言うと、昔ゼルフオンはディアンに一時期武術を教わったりしてます。

その時、ディアンは超スパルタでゼルフオンを教育したのでゼルフオンは、ほんとにディアンが苦手になったそう。

こういう裏話とか、考えるの好きなので、これからどんどん出していきたいです

それでは、次回もまた見てください！！（＞w＜）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9235c/>

満月の夜に願いをのせて

2010年10月23日02時04分発行